

---

# ああっ女神さま ドラゴンの騎士

キット・テイラー

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ああつ女神さま ドラゴンの騎士

### 【Nコード】

N0982V

### 【作者名】

キット・テイラー

### 【あらすじ】

ベルダンデー・ウルド・スクルド達女神様と平凡ながらも、幸せな生活を送っていた森里螢一。

ある日、父桂馬の行方不明事件を追っている中で、偶然見つけた謎のカードデッキ。

それを手にした時、螢一の幸せな日常生活は、無惨に崩れ去った。

二つの世界の命運を賭けた、森里螢一の戦いが、今始まる。

## プロローグ（前書き）

はじめまして。生まれて初めて小説を投稿します。

文才は全くありませんが、暖かく見守って頂けたら幸いです。

物語は、「劇場版 ああっ女神さま」終了時より、半年後のお話です。

## プロローグ

薄暗い通路を、黒いレザージャケットとライダーパンツという衣装に身を包んだ若い男女が走っている。

かなりの距離を走ってきたのか息を切らせながら男が言った。

「一体何故。アダムの奴、どういっつもりだ。」

「判らないわ。普段から何を考えてるか判らない奴だったけど、まさかゼイビックスについて私達を裏切るなんて。」

若い男レンの疑問に、傍らを走る金髪碧眼の美女ケイトが答える。

「後少しでゲートだ。そこまで行けば地球に逃れられる。それまで何とか。」

レンがそう呟いたとき、前方の壁が吹き飛び、中から全長6メートル程の全身が血の様に赤い色したドラゴンが飛び出した。

西洋のドラゴンというよりは、東洋の龍といった趣だ。

「ドラグレッダー！くそっ。もう少しなのに。」

レンが悪態をつくが、ドラグレッダーと呼ばれたその赤い龍は、雄叫びを上げながら二人に肉薄して来る。

「追いついたよ。こういうのを、年貢の納め時というんだろっなあ。どうかね？ウイングナイト。ファム。」

振り返ると、年齢にして4・50代の中年の男とドラグレッダーと同じ赤い色のアーマーを纏った人物が立っていた。

「ゼイビアックス！」

レンとケイトが憎しみを込めて叫んだ。

「残る仮面ライダーはお前達だけだ。お前達をベントすれば、ベントラは私のものだ。さあアダム！あの二人をベントしろ！」

ゼイビアックスは傍らに立つアダムと呼んだ人物に命じた。

「アダム何故だ？何故こんなことを…。」

レンがアダムに向かって悲痛な叫びを上げる。

「サラの為だ…。」

アダムは絞り出すような声で呟くと、左手の籠手の部分に装備されている、ドラグレッダーの頭部を模した装備「ドラグバイザー」の上部カバーを開き、腰のベルトの中央部にある四角いデッキの中から、カードを一枚取り出し、ドラグバイザーの上部カバーの中にベントインしてカバーをとじた。

「ストライクベント」

ドラグバイザーが無機質な電子音を発し、アダムが右手を翳すと、空中からドラクレッターの頭部を模した武器「ドラグクロー」が出現し、右手に装着された。

「終わりだ。レン。ケイト。」

アダムが冷たく言い放ち、構えた。

次の瞬間、ケイトがレンの前に立ちはだかった。

「ケイト！何をするつもりだ？」

ケイトの突然の行動に面食らったレンが叫んだ。

「貴方だけでも逃げて。レン。」

「馬鹿な。それなら君が…。」

レンの言葉を皆まで言わせず、ケイトは前を向いたまま、左手をレンに向けて突き出すと、衝撃波がほとばしり、レンの体を後方にあるゲート迄吹き飛ばした。

「ケイト〜！」

レンが声を限りに叫んだ。

その時、レンの頭の中にケイトの声が響いた。

「愛してるわ。レン」

刹那、レンの前方のゲートの向こうで激しい爆発音が聞こえた。

「ケイト〜〜！」

レンの絶叫が虚空にこだました。

猫実市の北のはずれにある他力本願寺。

本堂のとなりにある母屋の「森里屋敷」と札の貼られた一室で、森里螢一は目を覚ました。「9月だったのに、何なんだ。この暑さは。」

と、ぼやきながら上半身を起こす。

今年の夏は記録的な猛暑が続き、8月は連日30度を超える日が続いた。

それは、9月も半ばを過ぎた今でも続き、いつこうに涼しくなる気配は無い。寝起きのけだるさと、暑さで頭が回らず、上半身を起こしたまま布団の上でぼうつとしている時、入り口の障子の向こうから声がした。

「おはようございます。螢一さん。起きていらっしやいますか？」

「ああ。起きてるよ。」

「失礼します。」

そう言っつて障子を開け入ってきたのは、腰まである亜麻色の髪をポニーテールで止め、青と白を基調としたノースリーブのワンピースという出で立ちをした女性だった。

朝の光を浴びたその笑顔が、何とも美しい。

「おはよう。ベルダンデー。今日も良い天気だね。」

「はい。夕べはかなり暑かったようですが、螢一さん大丈夫でしたか？」

「ああ。結構寝苦しかったけど、ちゃんと休めたよ。」

「そうですか。それは良かったです。朝食の用意が整いましたので、居間にいらして下さいね。」

「ああ。判ったよ。顔を洗ってから行くよ。」  
「はい。お待ちしております。」

そんな会話を交わし、ベルダンディーが出て行った後、螢一は布団を押し入れに入れ、寝汗をかいて湿ったＴシャツとトランクスを脱ぎ、替わりのＴシャツとトランクスに着替え、ジャージを履いて部屋を出た。

洗面所にある洗濯機の中に洗濯物を放り込み、洗顔料をたっぷり泡立て顔を洗う。

居間に着くと、先客がいた。

「おつはよう。螢一。」  
「おはよう。スクルド。」

テーブルに座って、朝のニュース番組を見ながら、昨日ベルダンディーが買ってきたアイスを頬張っているのは、ベルダンディーの妹のスクルドだ。

「いつもいつもよく喰うな。アイス。」

半ば呆れた顔をしながら、螢一が呟く。

「うるさいわねえ。これが私のエネルギー補給なんだから良いの！」  
と、スクルドは螢一に舌を出してみせる。

やれやれ。と思いながら席につくと、ベルダンディーが朝食を運んでくる。

今朝のメニューは、ご飯に味噌味、だし巻き卵にマカロニサラダ、納豆だ。

「いただきます。」

「はい。召し上がれ。」

「うん。今日のご飯も美味しいね。」

「ありがとうございます。」

メニユーは平凡ながら、芸術的とも言える絶品の味に舌鼓を打つ螢一を、ベルダンディーは幸せそうな顔で、眺めている。

森里家の朝のいつもの光景だ。

「そういえば、ウルドは？まだ起きてこないの。」

「はい。夕べは遅くに帰ってきたものですから。」

ベルダンディーとスクルドの姉ウルドが、敵対する魔属であるが、昔からの友人でもあるマーラーと飲みに行つて来ると言つて、出て行つたのは、昨日の夕方頃。

帰つて来たのは夜中の3時を過ぎた頃だった。

ベルダンディー達女神三姉妹とマーラーは、女神と悪魔という立場の違いから、敵対してはいるものの、プライベートに関しては、良い友人関係を築いている。

最近月に一度は、こうしてマーラーと外に飲みに行つているのだ。

「まあ、最近は自分で稼いだ金で飲みに行つてるから、何とも言えないけどね。」と、螢一が言う。

ここ3ヶ月程前から、ウルドは、インターネットを使ったアフィリエイトの仕事を始めていて、その金は、森里家の貴重な収入源の一つとなっている。

もっとも、その金は、ウルド自身の飲み代も多少あるが、ほとんどは、螢一とベルダンディーの将来の結婚資金として貯めている事を、螢一達は知らない。

「ごちそうさま。今日もとっても美味しかったよ。」「はい。お粗末さまでした。」

食べ終わった螢一は、お茶を飲みながら、朝のニュース番組を見ている。

ベルダンディーは、スクルドと、台所で洗い物をしている。  
ここ最近、スクルドは、ベルダンディーの家事を、率先して手  
伝うようになった。

仲睦まじく、洗い物をしている二人の姉妹を眺めていると、  
「おはよう。」と、  
けだるそうな挨拶をしながら、長女のウルドが入って来た。

パジャマ替わりに着ている紫のネグリジエだが、寝乱れたまま  
になっているのに、本人は全く気にもとめない。

「あゝあ。夕べはちよつと飲み過ぎたかしら。あそこまで飲んだの  
は久しぶりねえ。」

あまりの扇情的な恰好に、螢一が直視出来ずに俯く。  
ベルダンディー達女神三姉妹と同居生活をして、三年の月日が  
経つ。

その間、こういった光景は何度もあったのだが、純情な螢一は中々  
慣れる事がない。

ベルダンディーとの仲もそんな感じである。

今年の春先に、ベルダンディーの恩師であるセレスティンが起  
こした天上界への反乱と、それに付随して地上界、特にこの猫実市  
を中心にして起こった大規模な高エネルギーの放出事件を経て、螢  
一とベルダンディーの仲は、前にも増して深まっていったのだが、  
未だにキスから先の関係には発展していない。

まあ、螢一とベルダンディーの交際を完全には認めていない、  
スクルドというお邪魔虫のせいというのもあるが、ウルドとしては  
歯痒くて仕方がないのだ。

しかし、こればかりは当人同士の問題なので、ウルドも前ほど  
のお節介をやく事もなく、見守る事になっている。

俯いたままの螢一を見ながら、ウルドがそんな思いに耽っていると、洗い物を終えて居間に上がってきたスクルドが、顔を真っ赤にして叫んだ。

「ちよつとウルド！なんて恰好してんのよ！服くらいきなさいよ！」  
喚くスクルドに、ウルドが鬱陶しそうにうそぶく。「まあお子様には刺激が強すぎたかしらねえ。」

「何ですってえ！いつまでも子供扱いしないでよお！」

今日も始まった、最早森里家の風物詩とも言えるウルドとスクルドの姉妹喧嘩を横目に、螢一はベルダンディーに声をかけた。

「それじゃ、バイクの整備してくるよ。」

「はい。わかりました。」

今日は螢一とベルダンディーが働くワールウィンンドは定休日。

休みの日は、何も無ければ、螢一は午前中のほとんどの時間を愛車のBMWの整備に使っている。

部屋に戻った螢一は、ジャージを脱ぎ、つなぎに着替えると、愛用の工具箱を携え、BMWが停めてある裏の倉庫へ向かった。作業は、順調に進んでいた。

「螢一。螢一。」

不意に名前を呼ばれ、螢一は頭を上げたが、周りに人の気配は無い。

空耳かと思い、作業に戻ったが、

「螢一。螢一。」

また名前を呼ばれ螢一は再び頭を上げ、自分を呼ぶ声の主を探したが、やはり誰も居ない。

訝しみながら、視線をバイクに戻した螢一は、驚いて声を上げた。

「桂馬さん!？」

バイクのバックミラーに、父桂馬の姿が写っていた。

後ろを振り向いたが、桂馬の姿は無い。

目を擦って、バックミラーをもう一度見直したが、確かに桂馬はそこに、鏡の中に居た。

「桂馬さん。これは一体…。」

「螢一。カードデッキだ。カードデッキを使い、ドラゴンを探せ。」

「カードデッキ？ドラゴン？一体どういう…。」

螢一がそう問い掛けようとしたとき、既に鏡の中に桂馬の姿は無かった。

「何だったんだ。今の。」 螢一はそう一人ごちたが、当然その問いに答える者はなく、何か頭に引っ掛かるものを感じながら、作業に戻った。

この出来事が、後に螢一を、二つの世界の命運を賭けた、過酷な戦いに引き込む事になろうとは、この時の螢一は、まだ知る由もなかった。

他力本願寺から、南へ約2キロメートル程行った所にある猫実市の中心街、JR猫実駅から歩いて10分程の距離にある4階建ての雑居ビルの一室に、ネットニュース配信社「OREジャーナル」はある。

この会社が扱うネットニュースは、真つ当なニュースから、かなりマニアックな内容のニュース、また、配信されるメルマガの定期購読者から寄せられる、様々な情報をもとに編集されるニュースと多岐にわたり、なおかつ中々に高い情報精度から、社長兼編集長の久保大介・専属記者の桃井麻弥と城戸真二・経理兼システム担当の島田奈々子と小所帯ながらも、まずまずの収益をあげている。

そのOREジャーナルの札がかかった扉を開け、記者の桃井麻弥が入って来て、開口一番久保に告げた。

「編集長。また行方不明者が出ました。今度は柳町の住人です。」

正面のデスクに座って、まごの手で背中を掻いていた久保が、麻弥に言う。

「またか。一体どういう事だ？」

「今月に入って、これで4件目つすね。どうなってるんすかあ。」

傍らのデスクで、パソコン入力をしていた城戸真二が、素っ頓狂な声を上げた。

麻弥は、今仕入れた情報を久保に説明し、しばらく室内に重苦しい空気が流れる。

「ここで黙っててもしよーがねえ。麻弥と真二は、行方不明者周辺の聞き込みに、もう一回行ってくれ。奈々子は、緊急メルマガを配

信して、購読者から、行方不明者に関する情報提供を呼びかけてくれ。」

と、大久保が矢継ぎ早に指示を飛ばすと、三人から小気味の良い返事が返ってきて、それぞれ作業を始め、或いは出て行った。

昼。他力本願寺。愛車のBMWの整備を終えた螢一は、部屋に戻って普段着に着替えると、一人物思いに耽っていた。

原因は、先刻の奇妙な出来事だ。

ベルダンディー達と暮らすようになってから、普通では体験出来ない様な事を色々体験してきた螢一だが、一つ一つの出来事が、余りにも突拍子もないような事ばかりなので、未だに慣れる事は無かった。

尚も一人で考え事をしていた螢一は、ベルダンディーの自分を呼ぶ声で我に返った。

「螢一さん。螢一さん。」「ああつ。ベルダンディー。ごめん。ちよつと考え事してたから。」

「そうですか。何だか随分難しいお顔をされていましたが、どうかなさったんですか?」

「いや。大丈夫だよ。ところで何?」

「はい。お昼の用意が出来ましたので。」

「ありがとう。すぐに行くよ。」

「はい。お待ちしております。」

ベルダンディーが出ていくと、螢一はため息をついた。

ベルダンディーは天上界の一級神の中でも、容姿・性格・法術

や歌の技量、神格、その他諸々すべてにおいてトップクラスの実力を持っている。

一見完全無欠に思えるこの女神にも弱点はある。

それは、螢一の実在である。

普段は穏やかで、美しい微笑をたたえている彼女も、少しでも螢一が浮かぬ顔をしていたり、落ち込んでいたりすると、一緒になって落ち込んでしまう。

ことに、螢一が災難に見舞われようものなら、

「自分は女神失格だ！」 等と言って、取り乱してしまふ始末。

螢一の事になると、完全に周りが見えなくなってしまうベルダンディーを、螢一は嬉しく思う反面、酷く申し訳ない気持ちになっってしまう。

そんな訳で、螢一は、ベルダンディーの前では、極力気丈に振る舞っている。最も、ウルドに言わせると、

「強い部分も弱い部分も、全てをさらけ出して、心を通い合わせてこそ本当の恋人同士なんだから、かまやしないわよ。」  
だそうである。

ウルドの言葉を理屈では理解しているのだが、いざ自分の事で悩んだり右往左往しているベルダンディーを見ると、そももいかないと思ってしまうのが、森里螢一という男の性分なのである。

頭の中に浮かんだ色々なモヤモヤを振り払って、螢一は居間に向かった。

相変わらずの絶品料理を全て平らげ、食後のお茶を飲んでいると、螢一の携帯電話が鳴った。

相手は妹の恵からだ。

「もしもし。俺だけだ。」 「あつ！螢ちゃん？大変なのよ！」

「何だ？どうした？落ち着けよ！」

電話の向こうで、慌てふためく妹を落ち着かせながら、螢一は言いようのない不安を抑えながら恵の言葉を待った。

「螢ちゃん。落ち着いてよく聞いてね。さっき鷹乃さんから連絡があつて。桂馬さんが：行方不明なんだつて！」

「なんだつて！」

突然上がった螢一の大声に、女神三姉妹が一斉に螢一の方を向いた。

螢一と恵の母鷹乃から、恵に一報があつたのは少し前。

鷹乃の話によると、桂馬が居なくなつたのは2日程前。

その日、北海道釧路市にある螢一達の実家で、桂馬は愛車のバイクの整備をしていた。数日前に駆動系の一部の部品が壊れ、その日注文した部品が届き、修理と整備が終わつて、桂馬は

「しばらく、その辺を走つてくる。」

と、鷹乃に言い残し、家を出た。

桂馬は一度ツーリングに出掛けたら、大体6時間位で帰つて来るのだが、その日に限つて、夜になつても帰つて来なかつた。

携帯電話にかけても全く繋がらないのを心配した鷹乃が、夜中に地元の警察に捜索願いを出したのである。

電話を切つて、しばし茫然自失となつた螢一だが、やがて弾かれた様に立ち上がると、

「俺警察に行つてくる。」と言ひ残し、部屋を出た。

部屋に戻つて、ライダージャケットを羽織り、バイクのキーを探していた螢一の視線が、机の上で止まつた。

机の上に黒い長方形の形の名刺入れの様な物が置いてあつた。

名刺入れにしては少し大きいし、第一螢一は、名刺など持つていなかった。

「何だこれ。さっきまでは無かつた筈なのに。」

不審に思いながら、その物体を手にとつた。側面を見ると、取

り出し口の様なものがあり、中にはカードが入っていた。

中に入っているカードは、全部で3枚。

表記に剣の絵柄が入ったカードが1枚で、後の2枚には、1枚は「SEAL」と書かれたカード、もう1枚は「CONTRACT」と書かれたカードが入っていた。

カードや、その入れ物を眺めながら、螢一の頭に思い浮かんだのは、先刻の桂馬の言葉だった。

「まさか、桂馬さんの言つてたカードデッキって、これの事じゃ…。」

「  
そう思いながら、カードを入れ物にしまい、改めてカードデッキを見直した。」

すると、突然そのカードデッキが光を放った。

面食らった螢一だが、次の瞬間、螢一の頭の中にサイレンの様な音が鳴り響いた。

その音が、余りにも大きい音だったので、螢一は反射的に耳を塞いだが、その音は、直接頭の中に響いているらしく目を閉じて、その音に耐えた。

暫くすると音が止み、螢一は部屋の中を見渡したが、特に変わった様子は無かった。

もう一度部屋を見渡し、異常が無いことを確認して部屋を出ると、ベルダンディーが、心配そうな顔をして立っていた。

「螢一さん…。」

「大丈夫だよベルダンディー。夕方には帰って来るよ。行ってくるね。」

「はい。お気をつけて。」 心配顔のベルダンディーの肩をポンと叩いて笑顔を見せ、出掛けて行った。

猫実市内の警察署に着くと、現在の捜査状況の説明を受けたが、これといった進展は無いとのことだった。

落胆と、しょうがないなという納得の入り混じった気持ちで、警察署を出たとき、先刻自室で聞いた、あのサイレンの様な音が鳴り響いた。

時間にして5秒程で鳴り止んだ後、何気なく正面のビルに視線を移した螢一は、思わず息を呑んだ。

何と正面のビルの一階のショーウィンドウに巨大な蜘蛛の様な異形の化け物が写っていた。

「お巡りさん。あれ！」　　と言って、入り口で立ち番をしていた警官に声をかけ、もう一度ショーウィンドウを見たが、そこにさっきの怪物の姿は無かった。

「どうかしましたか？」

と立ち番の警官に声をかけられ、

「いえ。何でもありません。すいませんでした。」と、警官に謝り、バイクを停めてある駐輪場に向かった。

バイクに跨がり、ヘルメットを被ろうとすると、また、あのサイレンの様な音が聞こえ、さっきのショーウィンドウを見ると、さっきの蜘蛛の怪物よりは小さいが、人間大の大きさの怪物が、数匹写っていた。

また、目の錯覚かと思いい無視しようとしたが、その怪物たちが、窓ガラスから飛び出してきて、携帯電話で話しをしながら歩いているレディーススーツを着た若い女性を追いかけて行った。

他の通行人には、怪物達は見えていないのか、素知らぬ顔で往來している。

追いかけられてる女性も全く気付いていない様子だ。  
「まずい！」

螢一はヘルメットを置いて、その怪物達の後を追った。

レディーススーツを着た女性・桃井麻弥は、携帯電話で話しをしながら、路地裏に入るべく角を曲がった。

その時、

「おい。待て！」

不意に声をかけられ振り向くと、黒いライダージャケットに白いレーナー・青いジーンズという出で立ちの若い男が立っていた。

年格好は、10代後半か20代前半といったところだ。

「おい。お前ら。そのまま動くな！」

若い男は半ば喚きながら、じりじりと自分に近付いて来た。

麻弥は、変質者かと思いつき後ずさりした。

一方若い男螢一は、目の前にいる怪物達が、麻弥を襲わないように牽制しながら前進する。

恐らく相手は、怪物が見えていないから、自分は相当に変な奴なんだろうなと思いつながら、螢一は麻弥に言った。

「早く逃げて！」

「う、うん。そうするわ。」

麻弥が言った瞬間、怪物達は、その言葉が合図であるかのように、麻弥に襲い掛かっていった。

螢一は、麻弥の手を掴むと、そのまま奥の路地に向かって走った。

「ねえ。一体何なの！？貴方誰！？」

「とにかく走って！」

状況が全く判らず、戸惑うだけの麻弥を、螢一は手を引いたまま尚も走った。ところが、前方の粗大ごみ置場に捨てられていた姿見の中から、新手の怪物が数匹現れた。

咄嗟に螢一は、麻弥をお姫様抱っこし、前から来た怪物達をやり過ぎした。

「何すんのよ！離して！」 突然の事に麻弥は、お姫様抱っこされた状態で、螢一の胸を何度も叩いた。

螢一は叩かれながらも、何とか麻弥の体を下ろし、怪物達から麻弥を庇うように立ち塞がると、

「早く逃げて！」  
と、麻弥を促した。

麻弥は螢一の行動に釈然としないものを感じながらも、後ずさりをしていると、不意に何かにぶつかったと思い、後ろを振り返ったが、何も無かった。

一方螢一は、背後の麻弥の気配を気にしながら、怪物達の攻撃をかわし続けていると、

「キヤー！」

悲鳴がして、振り返った。そこには、後ろから怪物に羽交い締めにされ、もがく麻弥の姿があった。

螢一が助けようとすると、怪物の一匹が立ち塞がり、螢一の鳩尾にミドルキックを放った。

反射的に螢一は両手でガードしたが、そのミドルキックには生半可ではない力が込められていて、螢一は4メートル程の距離を吹っ飛ばされ、地面に叩き付けられた。

余りの激痛に、地面を転がりながら、もがき苦しんでいると、

「キヤー！」  
再び悲鳴がして、怪物に羽交い締めにされた麻弥が、姿見の中に引きずり込まれていった。

麻弥が目を開くと、万華鏡を無数に散りばめられた様な空間に立っていた。

「何なの！？ここ？」

麻弥がそう言った時、背後で、

「グルルルル。」

という獣の唸り声の様な音が聞こえ、振り向くと、文字通り目と鼻の先に異形の怪物が居た。

「キヤー！」

悲鳴を上げながら、麻弥が飛びのいた。

怪物はボキボキと首を鳴らしながら、麻弥に迫ってきたが、突然何者かが、怪物の手を掴んで投げ飛ばした。

地面を転がりながら、尚ももがき苦しんでいる螢一を、怪物達が半円型になりながら近付いて来た。

もう駄目だ！殺される！螢一がそう思った時、先程麻弥と怪物が消えた姿見から、怪物が一匹飛び出して来た。

飛び出して来たというよりは、何かで吹き飛ばされたといった感じで現れた怪物は、他の怪物を巻き添えにししながら、地面を転がった。

驚いた螢一が、姿見の方を見ると、姿見の中から、サンガラスをかけた、黒いライダージャケットに紺のジーンズという出で立ちをした一人の男が、麻弥を抱えて現れた。

体格は、螢一の先輩の田宮や大滝程ではないが、かなりがっつきしている。

呆気にとられている螢一を余所に、怪物達は、その鏡から現れた男に一斉に襲い掛かった。

男は、抱えていた麻弥を離すと、そのがっつきした体格からは予想もしないような俊敏な動きで、時にはバック宙返りや側転宙返りといった動きを加えながら、巧みに怪物達の攻撃をかわして、次々と怪物達を薙ぎ倒していった。

薙ぎ倒された怪物達は、まるで煙の様に消えていった。

時間にして5分程で、7匹程居た怪物を倒したその男は、茫然としている螢一の元へ近付いて来た。

近付いて来る男の気配にハッと我に返った螢一は、

「あ、あの…。ありがとうございます。」

と、お礼を言いかけた時、男は、そのまま螢一に詰め寄ると、いきなり螢一の胸倉を掴んで怒鳴りつけた。

「カードデツキを渡せ！」「ええっ！一体どういっ…。」

「いいからカードデツキを渡すんだ！」

突然の事に戸惑う螢一に、男は尚も詰め寄った。

「ちょっと待って下さい！一体どういう事ですか？そもそも貴方は一体何なんですか？」

「死にたくなかったらカードデツキを渡すんだ！」

男が放つ殺気のような気配に、螢一は踵を返すと、そのまま逃げ出した。

麻弥は、つい先刻自分の身に起こった出来事と、目の前で始まった二人の男のやり取りに面食らっていたが、ハッと我に返ると、

バックの中からデジカメを取り出すと、一人になったサングラスの男を撮りだした。

男は写真を撮っている麻弥に気づくと、そのまま麻弥の手からデジカメを引つたくると、何とそれを片手で握り潰した。

「ちよつと！何すんのよ！」

握り潰したカメラを捨て、その場を去ろうとする男に、麻弥は叫んだ。

男はそのまま麻弥を無視し、近くに停めてあつた黒いバイクに跨がると、ヘルメットを被り、そのまま走り去った。

男から逃げた螢一は、ショーウィンドウにもたれ、今まで自分に起こつた出来事を整理しようと、考えを巡らせていた。

「何なんだよ。何で俺がこんな目に遭わなきゃいけないんだ？」

今にも泣き出しそうになりながら、螢一は一人ごちた。

「なんか、ベルダンディーと出会う前の自分に戻つたみたいだな。」

以前の自分を思い出し、半ば自嘲気味に笑っていると、例のサイレンの様な音が聞こえた。

「またかよ！」

吐き捨てながら辺りを見渡すと、後ろのショーウィンドウに、さっきの巨大な蜘蛛の怪物が姿を現した。

反射的に飛びのいた螢一だが、背後にあつた車にぶつかったと思つた瞬間、その車の窓ガラスに吸い込まれた。

気がつくと、螢一は、元居た場所に転がっていた。辺りを見回したが、特に周りに変化はない。

だが、何気なく前にあるガラス越しに写つた自分の姿を見て、

息を呑んだ。

いつの間にか、全身真っ黒のアーマーの様なボディースーツを身に纏っていた。

「何だこれ！一体どうなってるんだ？いつの間に、こんなもん着たんだ！？」

次から次へと起こる出来事に思考が追いつかず、軽い偏頭痛になりだした時、地鳴りがして、思わずその場にへたり込んだ。

頭を上げると、60メートル程先に、さっきの巨大な蜘蛛の怪物が現れた。

今度は、アーマー姿の螢一を見ると、地響きをたてながら螢一に迫ってくる。

「うわ〜！誰か助けて〜！」

情けない悲鳴を上げながら逃げようとしたが、足が纏れて、その場に転がり込んだ。

後ろを見ると、すぐそこに怪物が迫って来ている。もう駄目だ！そう思った時、近くにあった別の建物の窓ガラスから、屋根付きバイクの様な乗り物が現れ、怪物に体当たりをかけた。

怪物を吹っ飛ばしたその乗り物は、横滑りしながら停止した。

かなりの勢いでぶつかったにもかかわらず、乗り物の表面にはへこみ処か傷一つ無い。頑丈なボディーだなあと螢一が感心している、乗り物のハッチが開き、中から藍色のバットマンの様なアーマーを纏った人物が降りてきた。

「さっさと逃げろ。」

声からして音の様だった。

アーマーの男は、螢一に逃げる様に促すと、腰の剣引き抜き、怪物に向かって突進していった。

怪物は前足を突き出して男を迎え撃つたが、男は巧みに攻撃をかわしながら、丁度人の形をした部分に飛び乗り、その部分を縦横無尽に切りつけた。

一旦怪物から離れると、怪物は、腹部の大きな口を開き、そこから数本の矢を放った。

矢を剣で叩き落とし、剣を逆手に持ち替えると、柄の部分にあるカバーを開き、腰のベルトの中央部にあるカードデッキの中から、カードを一枚取り出し、柄の部分に挿入し、カバーを閉じた。

「ソードベント」

電子音が鳴った後、何処からともなく体長4メートル程の大きさの蝙蝠が現れ、男の頭上を通り過ぎた時、その手には西洋の騎士が使う槍の様な武器「ウイングランサー」が握られていた。

その武器を手に、男は再び怪物に向かって行った。

「あんな風を使うのか。」　螢一は、男のやった通りに、ベルトのカードデッキから剣の絵柄の入ったカードを取り出し、左手の籠手の部分にある装備に挿入した。

「ソードベント」

電子音の後、空中から細い剣「ライドセイバー」が出現し、螢一の前方の地面に突き刺さった。

「凄いなあ。」

感嘆の声を漏らした螢一は、ライドセイバーを引き抜いた時、男が怪物の攻撃を受けて吹っ飛ばされたのが見えた。

「うお〜〜!!」

「よせ〜〜!!」

雄叫びを上げながら、螢一は、男が止めるのも聞かず、怪物に向かって突進していった。

怪物に肉薄し、渾身の力を込めて、怪物の右前足に切りつけた。

途端、「ガキン」という鈍い音がして、ライドセイバーが真っ二つに折れた。

「折れた〜!!」

と、螢一が叫んだのと、怪物が、全くダメージの無い前足で螢一を吹っ飛ばしたのは、ほぼ同時だった。

男は、自分の方に飛んできた螢一を、持っていたウイングランサーで跳ね退け、螢一は、横の壁に叩き付けられた。

「邪魔するなあ〜!!」

男は螢一を怒鳴りつけると、腰の剣の柄のカバーを開き、別のカードを挿入した。

「アドベント」

電子音の後、さっきの巨大な蝙蝠が現れ、怪物に体当たりをかけた。怪物が倒れたのを見ると、男は再度別のカードを挿入した。

「ファイナルベント」

電子音の後、男はウイングランサーを持って走り出し、蝙蝠が男の背中に取り付き、巨大なマントに変わった。

その状態で、空中高く飛び上がり、空中でウイングランサーを下方に向けて構えると、背中のマントが、ウイングランサーを中心にドリルの様な形になり、怪物に突っ込んでいった。

必殺技「ダイビングスラッシュ」である。

ダイビングスラッシュが怪物に命中し、大爆発が起こった。

怪物の体は消滅し、そこから光の球体が現れると、さっきの蝙蝠が、その光の球体を吸収し、飛び去って行った。

「あの…。これは一体…。」

螢一は男に駆け寄り、躊躇い勝ちに声をかけた。

「危ない！」

男は螢一を突き飛ばし、自分もその場から飛びのいた。

次の瞬間、二人の居た地点で大爆発が起きた。

「グオ〜〜！」

空の方で大きな雄叫びがして、上を見上げると、全長6メートル程の全身が真っ赤の巨大なドラゴンが現れた。

「ドラグレッダー！」

男が叫んだ。

ドラグレッダーは、再度雄叫びを上げながら、真っ直ぐ螢一の方へ向かってきた。

「ええ〜！俺〜！？」

「逃げるぞ！」

訳が判らず、喚く螢一のアーマーの襟元を掴んで、男が走り出した。

ドラグレッダーは、逃げる二人に、口から火球を放ちながら追

いかけてきた。

「走れ！早く！」

男が螢一に呼びかけた時、二人のすぐ後ろで爆発が起き、爆風の直撃を受けた二人は、大きく前方に吹っ飛ばされた。

他力本願寺。「みんなのティールーム」と札のかかった部屋の中で、ベルダンディーは沈痛な表情で座っていた。

先刻の恵からの電話で、螢一は明らかに動揺していた。

出掛ける前に螢一の様子を身に部屋まで行ったとき、入り口の所で鉢合わせした。

「大丈夫だよ。」

と、笑顔で答えてくれたものの、その余りにも悲しげな笑顔が、余計にベルダンディーの心を不安にさせるのだった。

春先に起こったセレスティンの事件以来、久しぶりに見る姉の悲しげな表情に、スクルドが堪らなくなって声をかけた。

「お姉様。元気を出して。きっと大丈夫だよ。桂馬も螢一も。」

健気に自分を励ます妹の姿に、ようやくベルダンディーも表情を和らげた。

「そうね、ありがとうスクルド。」

ベルダンディーはそう言っ、スクルドの艶やかな黒髪を撫でた。

「そうだ！私お茶煎れてくるね。」

スクルドは、そう言っ立ち上がると、台所へ小走りに走って行った。

ここ数ヶ月で、スクルドは、女神として着実に成長している。

その理由は、やはり友達の川西仙太郎の存在だろう。

間もなくスクルドが、ティーセットをお盆に乗せてやってきた。

「はい。出来たよ、お姉様。」

「ありがとう。」

スクルドは、ティーカップに紅茶を注ぎ、ベルダンディーの前に差し出した。

「うん。美味しいわスクルド。ありがとう。」

しばらく紅茶を飲みながら、二人で他愛もない話しをしていると、

「おっ。二人共お茶してんのね。」

と、言いながら、天衣姿のウルドが入って来た。

「姉さん。天上界に行かれるんですか？」

「うん。桂馬の行方不明事件について、ユグドラシルに何か情報が入ってないか調べてくるわ。」

「ついでに、ケールストアのアイス買ってきて！」

「スクルド。遊びに行くんじゃないわよ。数日で戻ってくるわね。」

「はい。行ってらっしゃい。」

そう言って、ウルドは、テレビ画面の中に消えていった。

ウルドを見送った後、干してある洗濯物を取り込もうとベルダンディーが立ち上がった時、

「うわー！」

と、螢一の叫び声が、ベルダンディーの頭の中にこだました。

「螢一さん！」

ベルダンディーの悲鳴にも似た叫び声に、台所で洗い物をしていたスクルドが顔を覗かせた。

「お姉様。どうしたの？」「螢一さんに、危険が迫ってる。」

「ええっ！」

「螢一さん！」

「あつ。お姉様待つて！」　　ベルダンディーは洗面所の鏡の中に、スクルドも風呂呂場の湯舟の中に、それぞれ飛び込んだ。

爆発の衝撃で吹っ飛ばされたものの、なんとか受け身をとった  
は良いが、上を見ると、ドラグレッダーは、執拗に螢一達を追い  
かけて来る。

「しつこいなあ！何処まで追いかけてくるんだよ。」 二人が尚  
も逃げていると、前方にシヨーウインドーが見えた。

「ここから外へ出るぞ。」

「ええつ。どうやって？」

「鏡や姿が写り込むものなら、何でも良いんだ。お前に出来るか？」

男はそう言っつて、シヨーウインドーに飛び込んだ。

「そうか。あんなふうにするんだな。」

螢一も男に習っつてシヨーウインドーに飛び込もうとした時、逃  
がすものかと言わんばかりに、ドラグレッダーがシヨーウインドー  
にドラグブレスを連射した。 脱出口を潰されて、螢一は、まず  
まずパニックに陥った。

「鏡。鏡。いや、鏡じゃなくても、姿が写り込むものは。」

走りながら、螢一が呟いた時、道路脇に停めてあるスクーター  
が目に入った。

「あれだ！」

螢一が叫びながら、スクーターのサイドミラーに向かってダイ  
ブした。

気がついて辺りを見回すと、どうやら元の場所に戻ってきたら  
しく、見慣れた猫実の町並みが広がっていた。

ホッとして、溜め息をつくくと、それで気が抜けたのか、全身の  
ありとあらゆる場所が痛みだした。

余りの痛さに、その場でうずくまっつていると、

「螢一さん！」

と声がして、顔を上げると、スクーターのサイドミラーからベルダンデーが現れた。

愛しの女神をその目にして、更に気が抜けたのか、ベルダンデーの自分と呼ぶ声を聞きながら、螢一は気を失っていった。

麻弥は、自分をモンスターから助け出し、尚且つカメラを壊した男が去った後、暫し茫然としていたが、やがて気を取り直して、壊れたカメラを拾おうと目線を落とした時、少し離れた場所に財布が落ちていたのを見つけた。

中を開けると、いくらかのお金と銀行のキャッシュカードと、免許証が入っていた。

免許証の写真を見ると、一番最初に自分に声をかけてきた、あの若い男が写っていた。

「名前は森里螢一。この住所は他力本願寺ね。よし！財布返すついでに取材を申し込むか。」

免許証に記載されている螢一の顔写真と住所を再度確認すると、麻弥は螢一の財布をバックに入れると、自分の車を停めてある近くの駐車場に向かって歩き出した。

螢一が目を覚ましたのは、夕方頃の事だった。

枕元には、ベルダンデーとスクルドが、心配そうな顔で座っていたが、螢一が目を覚ましたのを見て、一気に表情が和らいだ。

「螢一さん！気がついたんですね。良かった。」

「二人共ゴメン。心配かけたね。」

「全くもう。世話がやけるんだから。」

「面目ない。でも、もう大丈夫だよ。」

「当然よ。私とお姉様で回復法術施したんだからね。」

「ありがとう。」

そこまでの会話の後、少しの間沈黙が広がった。

そして、ベルダンディーが口を開いた。

「螢一さん。どうして、あんな所で倒れておられたのですか？あそこで何があつたんですか？」

「わからない。いきなり鏡の中に吸い込まれたと思ったら、変なボディースーツみたいなもの着てて、そしたら今度は、でっかい蜘蛛の化け物に襲われて……。ゴメン。上手く説明出来ないや……。」

力無く俯きながら、呟く様な声で話す螢一を見て、ベルダンディーが螢一の手を、両手で包み込むように握りながら言った。

「わからないなら、無理に話さなくても良いですよ。私は、螢一さんが無事でいてくださるなら、それ以上何も望みません。」

「ありがとう。ベルダンディー。」

螢一が、ベルダンディーの手を握り返した。

暫く、お互いの温もりを確かめ合った後、ポケットの中のバイクの鍵を取り出そうとした時、財布が無いのに気がついた。

「まずい。財布が無い。どっかに落としたみたいだ。」

「まあ大変。探しに行かないといけませんね。」

「まあ大体落とした場所の目星はついてるから、とりあえず、もう一回警察に行ってくるよ。」

「はい。お気をつけて。」 机の横にあるカラーボードに置いてあるヘルメットを取り、再び出かけて行った。

市内に入り、県道を暫く走っていて、何気なくサイドミラーを見ると、黒塗りのカワサキZX14が近づいて来た。

「おおっ。良いバイク乗ってるなあ〜。」

螢一が感嘆の声を上げていると、そのZX14が、螢一のB

MWの隣に並んできた。

横目で顔を見てみると、さっきのモンスター達を倒して、螢一にカードデッキを渡せと迫ってきた男だった。

「あいつだ！」

反射的に螢一はスピードを上げて、男を振り切ろうとしたが、側車付きのBMWでは、中々思うほどのスピードは出なかった。

そのうち、前方の信号が赤になったので、螢一はやむを得ず停止した。

男も、螢一の隣に停まると、ズイツと螢一に向かって顔を近づけてきた。

「な、何ですか？」

螢一が狼狽していると、男は何を思ったか、螢一のBMWの鍵を抜き取った。

「ちょっと！何するんですか！？」

螢一の抗議を無視し、信号が青になると同時に、男は走り去った。

螢一は、とりあえず、近くにあるコンビニの駐車場にバイクを止めると、男の後を追った。

暫く行くと、男が路肩にバイクを止め、腕を組みながら立っていた。

「どうやら螢一が来るのを待っていたようだ。」

「一体どういふつもりですか！？鍵返してください！」

螢一が抗議の声を上げながら、男に詰め寄った。

男も螢一に詰め寄る。

「カードデッキは何処だ？」

「あれで別の世界にいけるんですよ？契約のカードって。」

螢一が契約のカードの事を口走った途端、男の態度が一変した。「誰からその事を聞いた！？」

「あのドラゴンの事…。」「あのドラゴンに、ドラグレッダーには関わるな！」「あれ、ドラグレッダーっていうんですか。でも何故…。」

「ドラグレッダーと契約を結べば、二度と元の生活に戻れなくなる。そうなる前にカードデッキを渡せ！」「それどういう事ですか？」

男の迫力に身じろぎしながらも、螢一が聞き返そうとすると、あのサイレンの様な音が聞こえてきた。

「何なんですか？この音。」

「入り口が開いた。誰かの身に危険が迫ってる。来い！」

そう言つと、男は螢一の胸倉を掴んで走り出した。

近くのビルの屋上迄上がつてくると、不意に男の悲鳴が聞こえてきた。

二人が悲鳴のした方に向かうと、作業服を着た中年の男が、蜘蛛の糸に絡め取られ、前方の姿が写り込んでいるステンレスの中に引きずり込まれようとしていた。

二人は、男に駆け寄り、二人掛かりで引つ張り出そうとしたが、中々容易にはいかなかった。

数分程引つ張り合いを続けて、漸く作業服の男を引き離れた。

モンスターが姿を消すと、男は

「この人を頼む。そこを動かすなよ。」

螢一に気を失った作業服の男を託すと、ステンレスの前に立ち、カードデッキを翳すと、ステンレスの中からベルトの様な物体が出現し、男の腰に装着された。

「変身！」

掛け声と共に、ベルトの中央部にカードデッキを装填した。

すると、男の四方に、鏡の様な物体が出現し、男の体を包み込むように、その物体が合わさると、男は先刻見たバットマンの様なアーマーを纏っていた。



カードデッキの中から、「CONTRACT」と書かれたカードを取り出し、向かいにあるビルにカードを翳した。

その螢一の動作に呼応するように、ビル窓の中からドラグレッダーが現れた。

モンスターの攻撃を受け止めながら、男が不意に螢一の方を見ると、今まさに契約のカードを翳し、ドラグレッダーと契約しようとしている螢一の姿があった。

「よせ！」

男が止めようと飛び出そうとしたが、モンスターに前足で体を掴まれ、動きを封じられた。

螢一は契約のカードを翳し、自分に向かって来るドラグレッダーを、じつと見つめていた。

「さあ来い。契約しよう。」

契約のカードが、淡い光を放つと、ドラグレッダーの体が炎に包まれ、螢一の体の中に入っていった。目を開くと、螢一はデイメンションホールに立っていた。

デイメンションホールの中で仁王立ちになった螢一に、ドラグレッダーが、螢一の体に巻き付く様に纏わり付くと、光の粒子となって螢一の体の中に入っていった。

すると、螢一の体に、前回の戦いで纏っていた黒いアーマーが装着された。

次に、頭部のマスクと腰のカードデッキに、ドラグレッダーの頭部を模した紋章が浮かび上がり、左手の籠手に装備されたカードを装填する装備ライドバイザーも、ドラグレッダーの頭部を模したドラグバイザーへと変化した。

最後に黒のアーマーが赤く変化していき、ドラグレッダーの力を宿した戦士、「仮面ライダードラゴンナイト」へと変身が完了した。

蜘蛛のモンスターと戦っていた男は、モンスターが放った矢の攻撃をジャンプでかわしたが、モンスターの巨大な前足の一撃で後方に吹っ飛ばされ、ビルの下へと落ちていった。

落下の最中、前回も出てきた蝙蝠型モンスター「ダークウイング」がマントとなって背中に装着され、空中を飛んだ。

それを、モンスターがビルの壁を這う様にして追いかけてきて、更に腹部の口から糸を放った。

男は、糸に絡め取られ、制御を失い再び地上に落下していった。地面に叩きつけられ、糸のせいで身動きを封じられた男に、モンスターがとどめだと言わんばかりに矢を放った。

そこへ、ドラゴンナイトと化した螢一が、矢を叩き落としながら立ち上がった。

「アドベントカードを使い！」

男がドラゴンナイトに言うと、ドラゴンナイトはドラグセイバーのカバーを開き、カードを一枚取り出しベントインした。

「ソードベント」

電子音の後、ドラグレッダーがドラゴンナイトの頭上を通り過ぎると、ドラゴンナイトの右手に青龍刀の様な武器「ドラグセイバー」が握られていた。

それを見たモンスターが、標的をドラゴンナイトに変え、再び矢を放った。

「うお〜〜！」

叫びながら、ドラゴンナイトがドラグセイバーを振り回しながら、矢を叩き落とし、ジャンプ斬りの要領で、モンスターの人の形をした部分を、思い切り斬りつけた。

「ザシュッ」

今度は折れることなく確実にダメージを与えた様だ。

「うわあ〜〜！」

再び叫びながら、モンスターを何度も斬りつけた。 剣捌きは素人丸出しだが、それでもしつかりダメージは与えている。

一旦間合いを離すと、モンスターが間合いを詰めようと迫ってきたので、手に持ったドラグセイバーを投げつけた。

ドラグセイバーは、モンスターの人の形をした部分の丁度胸の部分に突き刺さり、モンスターの動きが止まった。

「今だ！」

ドラゴンナイトは再度ドラグバイザーにカードをベントインした。

「ファイナルベント」

電子音の後、ドラグレッダーがドラゴンナイトの傍らに現れると、ドラゴンナイトは地面を蹴って空中高く跳び上がった。

空中で宙返りをして右足を突き出すと、ドラグレッダーがドラゴンナイトに向かってドラグブレスを放った。

ドラグブレスを受け、加速がついた勢いで、ドラゴンナイトは、必殺技「ドラゴンライダーキック」を放った。

「でやあ〜〜っ！」

ドラゴンライダーキックがモンスターに直撃し、大爆発がおきた。

モンスターの体は砕け散り、そこから光の球が現れると、ドラグレッダーがその球を吸収して消えた。

それを見届けたドラゴンナイトの中に、不思議な充実感が満ちていった。

モンスターを倒し、一息ついているドラゴンナイトの元へ、男が近づいて来た。

「人の忠告を聞かない奴だな。自分から泥沼に入ってきて来るとはな。これでお前は仮面ライダードラゴンナイトだ。満足か!？」

吐き捨てる様に言い放ち、男はドラゴンナイトから去ろうとした。

「待つて下さい！仮面ライダーって一体何なんですか？それよりも、貴方は何者なんですか？俺、森里螢一って言います。」

「俺の名はレン。仮面ライダーウイングナイトだ。」 ここで初めて、男は名乗り、近くにあるガラス窓の中に消えて行った。

元の場所に戻った螢一は、当初の予定通り財布の届け出がないかを、桂馬の事を聞きに行った警察署へ行き、届け出が無いことを確認し、紛失届を出して他力本願寺に戻った。

「ただいま。」

「お帰りなさい。螢一さん、お客様がみえてますよ。」

「俺に客？一体誰だい？」 「はい。桃井麻弥さんという方で、螢一さんのお財布を届けに来て下さったそうです。居間の方にお通ししておきました。」

「助かった。わざわざ届けに来てくれたのか。わかった。すぐ行くよ。」

ベルダンデーから来客がいることを聞いた螢一は、一旦部屋に戻ってヘルメットとジャケットを置くと、居間の方に向かった。

「すみません。お待たせしました…。って、貴女はさっきの…。」

そこには、さっきモンスターに襲われていた女性・麻弥が居た。

「さつきは助けて頂いてありがとうございます。私、こういふ者です。」

麻弥は、螢一に自分の名刺を差し出した。

「ネットニュース配信社・OREジャーナル桃井麻弥さんですか。へえー記者の方だったんですか。」

「はい。それと、これ落とされましたよね。」

「あつ、どうもすみませんでした。わざわざ届けて下さって。」

「いいえ。それで、2・3お話を伺いたいのですが、さつき私を襲った化け物達の事、それと私を助け出して、化け物達を倒した男の人について教えて頂けませんか？」

さつきのモンスター達や、レンと名乗った男の話になると、俄かに螢一の顔色が変わった。

「どうやら、そっちの方が、ここへ来た本当の理由みたいですね。」

「ええ。そうです。」

「っていうか、あのモンスター達が見えるんですか？貴女にも。」

「はい。モンスターに捕まって鏡の中に引きずり込まれてから、見える様になつたんです。それに、私を助けた男の人。私あの男にカメラ壊されたんです。そのカメラ弁償させたいですからね。」

カメラを壊されたのが、余程頭にきたのか、麻弥は思い切り苦虫をかみつぶした様な顔になった。

「折角ですけど、僕はあのモンスターの事や、男の事に関しては、よくわかりません。まあ、男の事に関しては、レンって名前だったことはわかりましたけど。」

「そのレンって人の素性や、連絡先とかわかりますか？」

「そんなの知りませんよ。」

麻弥の矢継ぎ早な質問攻めに、色々な事があつて精神的に参っていた螢一は、段々ライラが募ってきた。

「あのモンスター達って、何処から来たと思いますか？」

「すいませんけど、さっきも言ったように、僕にもわからないんです。これ以上答えられる事はありません。折角財布届けに来て下さって悪いんですが、今日はもう帰って頂けませんか？」

「わかりました。今日はこれで帰ります。最後にこれを見て下さい。」

そう言っただけで、一枚のリストを見せた。

何気なくリストを見ていた螢一の目が、一人の人物の名前を見つけた。

「桂馬さん。桃井さん。このリストは一体……。」

「私は、今ある行方不明事件を追ってます。そのリストに記載されている人は、今月に入って全国各地で謎の失踪をとげた人ばかりです。この人達の失踪に、あのモンスター達が関わっているとしたら、それが大きな手がかりになるかも知れないんです。ですから森里さん。もし何かわかったら、連絡を下さい。私も、お父様の事について何か情報が入れば、連絡します。」

「わかりました。ありがとうございます。ありがとうございます。」

「それでは、今日はこれで。長々とすみませんでした。」

寺の表門迄麻弥を見送った後、母屋の中に入ろうとした螢一を、ベルダンディーが躊躇いがちに呼び止めた。

「あの……。螢一さん。」

「何だい？ベルダンディー。」

「あの、その……。お父様の事、ご心配なされる気持ちはよくわかります。ですけど、くれぐれも危険な事はなさないで下さいね。」

「えっ！」

「螢一さんの身にもしもの事があつたら、私は……。私は……！」

「ベルダンディー。」

潤んだ瞳で、自分を見つめてくるベルダンディーを、螢一は堪らなく愛おしくなって、ベルダンディーを抱きしめた。

「大丈夫だよ。俺は大丈夫だから。」

「螢一さん。」

螢一の体から伝わってくる優しい思いを感じながら、ベルダンデーは、しばしその思いに身を委ねていた。

「ただいま。ってちよつと螢一。何やってんのよ！お姉様から離れて！」

「げっ！スクルド！」

丁度そこへ、仙太郎の所から帰ってきたスクルドは、二人のお熱い抱擁シーンを目の当たりにして、嫉妬の炎を燃やしていた。

「あらっ。お帰り、スクルド。」

「もう許さないわ！待ちなさい螢一〜！」

「わあ〜やめろ〜！」

と、いつもの如くやきもち妬きのシスコン女神と、追いかけてこをしている螢一であった。

次の日、いつもの様に螢一とベルダンデーは、職場であるワールウィンドで、それぞれの仕事をこなしていた。

オーナーの藤見千尋と雑談を交わしながら、作業に没頭していると、あのサイレンの様な音が聞こえてきた。

「嘘だろ！まさか、こんな時に。」

思わず上がった螢一の叫び声に、ベルダンデーと雑談に興じていた千尋が、訝しみながら言った。

「なに。森里君。何が、こんな時に！なの？」

「い、いえ。何でもありません。」

千尋の突っ込みに冷や汗をかきながらも、とりあえずその場はお茶をにごしておいた。

「変な森里君。でね〜、ベルちゃん。」

ベルダンデーとの雑談に戻った千尋を見て、螢一は溜め息をついた。

初めは無視しようと思ったが、一度あんなものを見てみると、お人よしの螢一としては、黙って見過ごすことなど出来なかった。

それに、桂馬の失踪に、あのモンスター達が関わっているとしたら、やはり自分と同じ家族が行方不明という人を、これ以上増やしたくないという気持ちも強かった。

数秒で螢一の覚悟は決まった。

「千尋さん！すいませんが、ちよつと出かけてきます！」

「ちよつと森里君！何処行くのよ！？」

「直ぐに戻ります！」

そう言い残し、螢一は出て行った。

「ベルちゃん。森里君どうかしたの？」

「それが私にも…。ただ、数日前にお父様が行方不明になられたそうで…。昨日も、その事について記者の方が訪ねてこられたんですが…。」

ベルダンディーが、歯切れの悪い調子で答えた。

「そう。何だか大変な事になってるんだね。」

ワールウィンドの店内に、しばし沈痛な空気が流れた。

「それならそうと、言ってくれれば言いのに。水臭いなあ。帰ってきたら、その辺りを充分に言い聞かせてやる！」

拳を振り上げ吠える千尋を、ベルダンディーは苦い笑顔で見つめていた。

モンスター発生を知らせる音が道標になっているのか、螢一は迷う事なくモンスターの発生場所に行く事ができた。

そこには、先客がいた。

「桃井さん。」

「あつ、森里君。来たのね。」

「桃井さんにも聞こえるんですか？この音。」

「ええ。そうみたい。ところで、これからどうするの？」

「とにかく、モンスターを探します。」

そう言いながら辺りを見回すと、近くの店のショーウィンドーの硝子の中に、モンスター数匹に引きずられてる若い女性が見えた。気を失っているのか、ピクリとも動かない。

それを見た螢一は、ポケットからカードデッキを取り出すと、ショーウィンドーに翳した。

すると、窓ガラスから「Vバックル」が出現し、螢一の腰に装着された。

「変身！」

掛け声と共に、カードデッキをVバックルに装填すると、人の形をした鏡の様な物体が螢一の体を包み込む様に合わさり、ドラゴンナイトへと変身した。

「桃井さん。これが、鏡の中で戦う時の恰好です。あのレンって人は仮面ライダーって呼んでましたけど。それじゃ、行ってきます。」

麻弥に説明すると、ドラゴンナイトはガラスの中に飛び込んだ。麻弥は、初めて見る変身シーンに、しばし啞然となっていた。

窓ガラスの中に入ったドラゴンナイトは、ライドシューターに乗り込むと、機体を立ち上げ、アクセルグリップを握ってライドシューターを発進させた。

やがて、デイモンションホールを抜けると、そこには、若い女性を引きずって進んでるモンスターの一団がいた。

ドラゴンナイトは、ライドシューターから降りて、モンスターの一団に駆け寄った。

「その人を離せ！」

そのドラゴンナイトの叫びに答える様に、一番後ろにいた一頭のモンスターが、ドラゴンナイトの方を向いた。

ドラゴンナイトは思わず息を呑んだ。

全身黄土色と金色が混じった様な色の、二足歩行している蟹の様なモンスターだった。

そのモンスターが両手のハサミを振り上げて向かってきたので、ドラゴンナイトは、その胸元に右ストレートを放った。

「痛つてえ〜！」

攻撃が命中したものの、そのモンスターの体表は、とてつもなく硬かったので、ドラゴンナイトは右手を摩りながら、後退した

「くっそ〜！」

ドラゴンナイトは同じ箇所に、今度は中段蹴りを放った。

「硬つてえ〜！」

やはり、全く効いていない様だった。

モンスターは、今度は猛然と攻撃を繰り出してくる。

体表の硬さと、モンスターのパワーに、ドラゴンナイトは防戦一方だ。

そのうち、モンスターの攻撃を受け切れなくなり、右のハサミが、ドラゴンナイトの胸元を直撃した。

「うわ〜！」

大きく吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられたが、何とか受け身をとって体勢を立て直した。

「くっそ〜。だったら〜。」

ドラゴンナイトは、ドラグバイザーにカードを一枚ベントインした。

「ソードベント」

空中から現れたドラグセイバーを掴んで、モンスターに切りかかる。

多少のダメージは与えているものの、やはりそれ程効いていないようだ。

それでも、何とか一進一退の攻防を繰り返していたが、元々のパワーの差が出てきたのか、またもドラゴンナイトの方が押されだした。

そして、何回目かのモンスターのハサミの攻撃がクリーンヒットして、ドラゴンナイトがもんどりうって倒れた。

「くっそ〜！どうすりゃいいんだ！」

半ば絶望的な叫びを上げた時、通路の方から、一台のライドシユーターが現れた。

「助かった。来てくれたのか。」

安堵の声を漏らしたドラゴンナイトだが、ドラゴンナイトの前を通り過ぎ、しばらく進んだ所で停まった。

そして、ライドシユーターの上部ハッチが開いて降りてきたのは、レン・仮面ライダーウイングナイトではなかった。

「別の仮面ライダーか。」 ドラゴンナイトは少し驚いたが、とにかく味方かと思い、その仮面ライダーの元へ駆け寄った。

「助かりました。どなたかは知りませんが、一緒にあのモンスターの…。」

そこまで言った時、不意にそのライダーが攻撃してきた。

「ちょっと！何するんですか!？」

ドラゴンナイトの問い掛けを無視し、ライダーは尚も攻撃を仕掛けてきた。

ドラゴンナイトは、何とかガードするものの、相手は戦い慣れているのか、巧みにドラゴンナイトのガードの隙について攻撃してくる。

壁際に追い詰められたドラゴンナイトを、ライダーは左手のガントレット部に装備された鉤爪の様な武器で攻撃してきた。

ドラゴンナイトはドラグセイバーで受け止めた。

「止めてください！俺は敵じゃありません。どうして戦わなきゃいけないんですか？」

「黙って戦え！」

ドラゴンナイトの問いに、ライダーは、ぶっきらぼうに言い放った。「へへっ。やっと喋ってくれましたね。」

そういうと同時にドラゴンナイトは、丁度から空きになっているライダーの下腹に、思い切り蹴りを入れ、更にうずくまったライダーに足払いをかけた。

空中で一回転して地面に叩きつけられたライダーに、ドラゴンナイトが追い撃ちをかけようと向かって行くと、横から蟹のモンスターが攻撃してきた。

「くっそ〜。またお前か！」

ドラゴンナイトが喚きながら、応戦する。

しかし、また横からライダーが、同時に攻撃してくる。

2対1で、しかも格闘技素人のドラゴンナイトは、成す術もなくライダーとモンスターの同時攻撃を喰らいつづけ、またもや吹っ飛ばされた。

地面を転がり、何とか体勢を立て直したドラゴンナイトに、ライダーとモンスターが、ゆっくりと迫ってきた。

「あんた！そのモンスターとグルなのか！？」

ドラゴンナイトが喚くが、ライダーは問答無用とばかりに、再度攻撃してきた。

仮面ライダーウイングナイト・レンは、モンスター出現の警鐘を聞き、現場へ向かうべくバイクを走らせていた。

やがて現場に到着したレンは、バイクを降りると、近くにある電話ボックスの前に立った。

ガラスには、赤い仮面ライダーが、別の仮面ライダーとモンスターを相手に戦っているところが映し出されていた。

「仮面ライダードラゴンナイトに、仮面ライダーシザースか…。」

レンはそう呟くと、カードデッキを翳し、変身しようとして一旦その動作を止め、ガラスの中で繰り返らている戦いを眺めていた。

戦いは、明らかに赤い仮面ライダー・ドラゴンナイトが圧されていた。

何とか攻撃しているものの、その動きは、全くの素人だ。

一方の茶色の仮面ライダー・シザースは、空手か何かの経験者なのか、中々良い動きをしている。

レンは腕を組みながら、暫くその戦いを眺めていた。

「くっそ〜。もういい加減にしろ〜！」

ドラゴンナイトは、怒声を発しながらシザースとモンスターに向かって行くが、やはり敵わない。

一旦ドラゴンナイトとの間合いを離れたシザースは、左手の鉤爪の装備を開き、デッキからカードを出してベントインした。

それが、シザースの召喚機「シザースバイザー」だ。

「ストライクベント」

電子音の後、空中から蟹のハサミのような武器「シザースピンチ」が出現し、右手に装着された。

ドラゴンナイトと押し合いをしていたモンスターは、シザースがシザースピンチを装備したのを見ると、ドラゴンナイトから離れ

た。

それをみたシザースが、シザースピンチを振るってドラゴンナイトに向かってきた。

自分との間合いを離れたモンスターに気をとられていたドラゴンナイトは、シザースの振るうシザースピンチの一撃をまともに喰らった。

「うわ〜！」　またまた吹っ飛ばされたドラゴンナイトは、そのまま地面を転がり回った。

そこへシザースが近づいてきて

「もう一発喰らうか？」  
と、言い放つ。

「また今度にするよ。」

そう言つとドラゴンナイトは、近くの窓ガラスに逃げ込んだ。

レンは、戦いが終わったのを見届けると、一つ溜め息をついて、バイクに跨がり走り去った。

一方、別の窓ガラスから出てきたシザースは、変身を解除した。そこには、螢一と同じ年か少し年上の、どこと無く軽薄そうな若い男がいた。

「くっそ〜。もう少し楽に稼ぐ方法はねえのかよ！」　男は毒づきながら、街中に消えて行った。

猫実市内にあるビルの一部。その弁護士事務所とおぼしきオフィス、立派な執務机にある電話の受話器を、壮年の男が取って、電話に出た。

「はい。こちら小中法律事務所です。やあ雅史君か。どうかね？その後は。」

「どうもごうもねえよ。腰は痛いし頭もガンガンするし。もっと楽に稼ぐ方法はねえのかよ？」

「おやおや。もう根を上げたのか？君は今迄、お父上の脛をかじって生きてきたからわからないだろうが、お金を稼ぐというのは、とても大変な事なのだよ。まして君は、2億円という莫大なお金を稼ごうとしているんだ。そのくらいのリスクは付き物さ。」

電話の男小中弁護士と名乗った男は、事もなげに言った。

「いや…。だけどさあ〜。」

電話の相手は、まるで子供の様に駄々をこねる。

「人間生きていく為には、働いてお金を稼がなければいけない。どうしても今の仕事が嫌なら、別の仕事を紹介しようか？例えば、コンビニの店員とか、警備員の仕事とか。後、かなり特殊だが、「マングロ拾い」なんて仕事もあるぞ。殺人事件や事故等の現場で、死体を片付ける仕事なんだが、ちょっと気味悪い仕事かもしれないが、その分給料は良いぞ。場合によっては、月に3・40万位稼げる事もある。どうかね？」

「い、いや。やめとくよ…。」

小中の提案に、電話の相手は恐縮するように言った。

「それならしっかりやりたまえ。期待しているよ。須藤雅史君。いや、仮面ライダーシザース。」

小中はそう言って、電話を切った。

須藤雅史は、携帯電話を切った後、ベンチに座り、ポケットからカードデッキを取り出して、それを見ながらしばし物思いに耽っていた。

その間、須藤の脳裏に浮かんだのは、さっきまで電話でやり取りし、このカードデッキをくれた人物、小中弁護士の事だ。

小中に出会ったのは二週間程前、自宅の表門で声をかけてきた。その日、いつもの様に仲間数人と、愛車のミニバンで街に繰り出し、好みの女をナンパして繁華街のラブホテルで乱痴気騒ぎを繰り広げ、猫実市内の一等地にある自宅に帰ってきた時、門の前に居たのが小中弁護士だった。

「おい、おっさん。そこ退けよ！」

一見して年長者とわかる小中に不遜な態度で迫るが、小中は気にした素振りを見せず、飄々と須藤に話しかけてきた。

「これは失礼。須藤雅史君だね？私は君のお父さんの顧問弁護士を勤めている、こういう者だ。」

そういつて、小中は須藤に自分の名刺を差し出した。

「県弁護士会 小中照美」と、名刺には書かれている。

「ふん。親父の弁護士ねえ。それで、俺に何の用だよ。おっさん。」

相変わらず不遜な態度の須藤をサラッと流し、小中は言った。

「実は、君のお父さんから君の事を頼まれてねえ。君を一人前の自分の跡取りとして育てて欲しいそうさ。したがって、それまでは、この家の出入りも禁止。金輪際一切の援助もしないそうさ。」

小中の話しに、須藤の顔から血の気が引いた。

「はあっ？何だそれ。どういう事だよ！？」

須藤が、今度は、顔を真っ赤にして喚いた。

「とりあえず、ここでは落ち着いて話しても出来ないから、私の車でドライブをしながら話そう。」

そう言って須藤を、自分が乗ってきたシルバーのアリストの助手席に乗せ、車を発進させた。

車内で、須藤は小中から、事実上自分が勘当された事、自分が一人前になって、ある程度社会的に認められた時に、改めて自分の跡取りとして迎え入れる等色々な話しを聞いたが、突然の事に俯いて頭を掻きむしった。

「ふざけやがって！今迄俺が欲しい物全部与えて、散々すき放題させといて、今更一人で生きるだど！？全然納得出来つかよ！」

「確かに虫の良い話だな。だが、お父上は君にはい上がって来て欲しいのだよ。世間の荒波に揉まれて、一人前の逞しい男になって欲しい。それもまた、お父さんの心からの願いなのだよ。」

小中は、淡々と話しをすると、車を喫茶店に停め、須藤を連れて、中に入った。

コーヒを二つ注文し、一口飲んだ須藤は、小中に言った。

「俺は、これからどうしたらいいんだよ？」

途方に暮れた須藤の問いに、小中は窓を指差した。

二人が居る喫茶店の向かいには、全国チェーンを展開しているドラッグストアがあり、店頭では、店のロゴマーク入りのエプロンをかけた若い男女の店員が、頻りに客引きをしている。

「何だよ。俺にあれをやれってか？冗談じゃねえよ！」

「あれをやるのも一つの手だ。あれをやるのも良いが、もっと手っ取り早く大金を稼ぐ手がある。ただし、こちらの方は、かなり危険を伴うがね。」

「へえー。んで、その方法は？」

須藤の問いに、小中は一呼吸置いて、勿体振る様に話した。

「君は、武術の心得があるそうだね？」

「ああつ。女の気を引けるからな。モテる為にやってんのよ。因みに空手の段持ちだぜ！」

小中の問いに、須藤は得意げに答えた。

小中は、微かな微笑を浮かべると、背広の胸ポケットから、蟹の様な紋章が描かれたカードデッキを取り出し、須藤の前に置いた。須藤がそれを手に取ると、カードデッキが淡い光を放った。

「はあ。すっげ〜なあ、これ。んで、これ何だよ？」

「君の仕事道具だ。これと同じ物を持った者と戦い、もし倒す事が出来たら、一人につき2億円の報酬を出そう。」

「2億！マジで！？おっしやあ。やってやんぜ！」

「これで、取り引き成立だな。それでは今夜は、私のオフィスに泊まりたまえ。明日、他のデッキを持った者の居場所を教えよう。」

そう言つて二人は立ち上がるり、会計を済ませると、車で小中の事務所に向かった。

そんな数日前の出来事を思い出し、須藤は立ち上がってカードデッキをポケットにしまうと、そのまま歩いて行った。

数日後、螢一は麻弥に呼び出されて、OREジャーナルを訪ねた。

麻弥から、行方不明者に関する新しい情報が入ったから来てほしいと連絡があり、ワールウィンドが休みの日である、今日会おうという事になった。

OREジャーナルの札のかかったドアをノックして中に入ると、麻弥が出迎えた。

「いらっしやい森里君。ここじゃ何だから、そっちの部屋で待つて。」

「はい。わかりました。」 螢一は麻弥に促され、OREジャーナルのオフィスの向かいにある応接室に入り、ソファアーの一つに座った。

麻弥は、冷蔵庫の中から、ペットボトルに入ったお茶を取り出し、グラスに注いでお盆に乗せ、自分のノートパソコンを持って部屋を出た。

麻弥が出て行った後、真二が、螢一の品定めをする様に言った。「あれが麻弥さんの言ってた森里螢一君かあ。なんかパツとしない感じの子だよなあ。」

自分が感じた螢一の第一印象を、真二が言った。

「おい真二。おめえもジャーナリスト目指してんだつたらよ、見た目だけに囚われんなっていつも言ってたんだろ。そんなんじゃ、いつまでたっても成長しねえぞ！」

と、大久保が真二をどやした。

「そーよ真二君。そういえば、彼の家に取材に行った時に、麻弥言つてたけど、森里君すつごく美人な外人の女の人と住んでるみたいよ。」

奈々子が、会話に割って入ってきた。

「えっ、マジっすか!? うわ〜良いなあ。」

真二が奈々子の話しに食いついた。

「確か、その女の人、ベルダンディーさんって言ったかな。あと、その時は居なかったみたいだけど、そのベルダンディーさんのお姉さんと妹さんの4人で住んでるんだって。」

「へえー。良いなー。男として、マジ羨ましいぜ。」 「ベルダンディーさん本当に美人だったらしいから、きつとお姉さんと妹さんも、

美人なんだろうなあ。」「ってことは、もしかして、毎晩その美人姉妹と、取っ替え引っ替えやってんのかなあ。」

「あゝ。それ有り得るかも。見た目誠実そうだけど、案外肉食系だったりして。」

「なんだそれ。ハーレムじゃん！」

だんだんと下ネタチックな話して盛り上がる真二と奈々子。

そんな二人のやり取りを見ていた大久保が、呆れ顔で言った。

「おいお前らなあ。くだらねえ事言っただけで、仕事しろ！仕事。」

大久保にどやされて、二人は、まだ言い足りないという表情を剥き出しにしながらも、それぞれの仕事に戻った。

一方応接室の方では、オフィスとは逆の沈痛な空気が漂っていた。

「やっぱり父は、モンスターに誘拐されたんですね。」

「ええ。そう思って間違いないわ。全国で多発している謎の行方不明事件。そのうち、君のお父さんも含めた今わかってるだけで7件の事件で、対象の人が行方不明になるほんの少し前に、モンスターの目撃情報が出てるの。」

麻弥の説明に、螢一は絶句した。

「そんな…。俺はただ、父は単に家出ただけだって思ってた。いつか帰ってくるって、そう思ってただけなのに…。」

「でも、これが事実よ。モンスターに誘拐されたなんて、まるで漫画みたいな話しだけど、でも実際に起こってるんだしね。」

「でも、桃井さん。どうやってこんな情報を得たんですか？」

螢一が、至極当然な疑問を投げかけた。

最初にモンスターを見かけた時、他の人には見えていなかった筈だ。

当の誘拐されかけた麻弥にしても、捕まる迄は見えていなかったのだから。

それが、この情報を提供してくれた人達は、どうやって見たというのだろうか。　　螢一にしてみれば、当然の疑問だった。

「インターネットや、うちのメルマガ購読者に、情報提供を募ってみたの。そしたら、この人達が情報をくれたの。勿論裏付けをとるために取材もしたわ。それで話しを聞いたら、モンスターが被害者を鏡の中に引きずり込む寸前の時を見たっていうのが、全ての目撃情報の共通点よ。どうやらモンスター達は、被害者を鏡の中に引きずり込む時だけ、他の人にも見える様になるみたいね。」

螢一は納得したように頷いたが、それでもまだ、桂馬の失踪の事実を全部受け入れる事は出来なかった。

また、新しい情報が入ったら連絡すると互いに約束し、螢一は帰途についた。

バイクを停めてある駐輪場に向かう途中、螢一の頭の中に、あのサイレンの様な音が鳴り響いた。

「出たな。」

そう呟きながら辺りを見回すと、近くの店のショーウィンドーに、先日戦った蟹の仮面ライダー・シザースが現れ、螢一に向かって手招きした。

「くそ！」

毒づきながら、螢一は、ポケットからカードデッキを取り出し、ショーウィンドーに翳した。

Vバツクルが出現し、腰に装着される。

「変身！」

掛け声と共にVバックルにカードデッキを装填し、ドラゴンナイトに変身すると、シヨーウインドーに飛び込んだ。

薄暗い倉庫の様な建物の中で、二人の仮面ライダーは対峙した。「始める前に教えてくれ。何故俺を付け狙うんだ？」　ドラゴンナイトはシザースに問いかける。

「俺が欲しい物を持つてるからだ。」

「それは何だ？」

「2億円だ。」

「何だつて！」

シザースの言葉に、ドラゴンナイトは狼狽した。

シザースは、左手にあるシザースバイザーを展開し、デッキからカードを取り出しベントインした。

「ストライクベント」

空中からシザースピンチが出現し、右手に装着された。

それと同時にシザースは、シザースピンチを振るって向かってきた。

ドラゴンナイトは、何とかシザースの攻撃をかわし、受け止めながら反撃のチャンスを伺うが、シザースは反撃の隙を与えず、巧みに攻撃してくる。

左手のシザースバイザーの攻撃がヒットし、ドラゴンナイトは壁に叩きつけられた。

「うわ〜！」

仰向けに倒れながら、ドラゴンナイトはドラグバイザーを展開し、カードをベントインした。

「ガードベント」

シザースピンチの攻撃を、空中から現れた「ドラグシールド」で、間一髪で受け止めた。

「どういう事だ。俺が金持ちに見えるのか？」

「へっ！見えねえなあ。せいぜいドラッグストアの店員ってところか？」

「何だと！」

馬鹿にしたようなシザースの物言いに、さすがのドラゴンナイトも激昂した。

そんなドラゴンナイトに構わず、シザースは再度攻撃してきた。

「一人につき2億円。お前からクス共を倒せば貰えるんだよ！」

「何だって！」

とんでもないシザースの話しに、ドラゴンナイトは面食った。

それで隙が出来たのを、シザースは見逃さず、シザースピンチを思い切り振るった。

何とか受け止めたものの、すかさず第二撃が来て、その威力でドラグシールドが弾き飛ばされた。

その瞬間、ドラゴンナイトの胸元が、がら空きになりシザースは、そこにシザースピンチとミドルキックを連続で叩き込んだ。

「ぐふぁー！」

ぐぐもった呻き声を上げて、ドラゴンナイトは吹っ飛ばされた。

レンは、とあるビルの屋上で、トレーニングに励んでいた。

その最中、仮面ライダー同士の戦いの気配を感じたレンは、バイクに跨がり、現場に向かった。

暫く行くと、ガラス窓のついたドアが目に残ったので、レンはその前にバイクを停めた。

バイクからは降りず乗ったまま、カードデッキを翳した。

「変身！」

掛け声と共に、Vバックルにカードデッキを装填し、アクセルを吹かし、そのままバイク毎ガラス窓に突っ込んだ。

デイメンションホールの中をバイクで進み、その中でウイングナイトに変身すると、ウイングナイトのマスクと同様のデザインの装甲がバイクに装着され、ウイングナイト専用バイク「ウイングサイクル」となり、デイメンションホールを抜け、戦場へ向かった。

今日何度目かのシザースの攻撃を受け、吹っ飛ばされたものの、倒れずにその場に踏み留まったドラゴンナイトは、ドラグバイザーにカードをベントインした。

それを見たシザースも、シザースバイザーにカードをベントインした。

「ストライクベント」

「ガードベント」

空中から現れたドラグクローを装備したドラゴンナイトは、そのままドラグクローを装備した右手を突き出すと、それと同時に現れたドラグレッダーが、巨大なドラグブレスを放った。ドラグクローの固有技、「ドラグクローファイアー」だ。

この技は、ドラグクローを装備すると使える技で、威力は、ドラゴンナイト最大の必殺技ドラゴンライダーキックには劣るものの、並のモンスターなら、一撃で倒す事が出来る。

その攻撃を、左手のシザースバイザーの上に装着された「シエ

ルディフェンス」で防いだものの、その衝撃迄は防げずに大きく吹っ飛ばされ、壁に叩きつけられた。

「この辺でそろそろ止めてもらえませんか。あんたに聞きたい事があるんだ。」「うるせえよ！」

ドラゴンナイトは停戦を呼びかけたが、シザースは構わず向かってくる。

跳躍しながら、シザースバイザーを振るってドラゴンナイトに向かってきた時、横からウイングナイトが、ドロップキックで、シザースを撃墜した。

「来てくれたのか！」

真正銘の援軍に、安堵の声を上げるドラゴンナイト。

「何だ、てめえは〜！」

突然の不意打ちを喰らったシザースは、今度はウイングナイトと戦いだした。最初は、互角に戦っていた二人だが、そのうち、ドラゴンナイトとの戦いで少し疲労が出てきたのか、シザースが押し込まれた。

「よ〜し！」

体力が少し回復したドラゴンナイトが、戦いに参加した。

いくらドラゴンナイトが格闘技ド素人とはいえ、やはり2対1の戦いは、堪えるようだ。

「ちよつと待った〜！2対1なんてフェアじゃねえ。冗談じゃねえよ〜！」

シザースは、そう言い残し、近くの割れた鏡の中に消えていった。

前は、そつちも、モンスターと組んで2対1の戦いを仕掛けてきたくせにと、頭の中で思いながら、ドラゴンナイトはウイングナイトに聞いた。

「この後はどうするんですか？レンさん。」

「お前を巻き込みたくなかったんだが、こうなっては仕方ない。先  
ず戦い方を覚えるんだ。ついて来い。」 そう言っ  
てウイングナ  
イトは、シザースが消えた鏡の中に入っ  
ていった。

「いきなり来て何なんだよ！」

一応助けてもらったのだが、そんな事も忘れ、ウイングナイト  
に愚痴を吐きながら、ドラゴンナイトも後に続いた。

「戦士となった以上、戦う術を身につける。」

「そんな事より質問に答えて…。」

そこまで言いかけたドラゴンナイトを、ウイングナイトはいきなり殴りつけた。

「何を…。」

「訓練は必要ないか？」

ウイングナイトは今度は、腰にさしていた剣ダークバイザーを抜いて斬りつけてきた。

「ちよつと！ホントに戦うんですか!？」

「本当の戦いだと思え！どうした。ガードしろ！」

有無を言わせぬウイングナイトの攻撃に、為す術も無いドラゴンナイト。

「だからちよつと待つてくれって！」

地面を転がりながら、何とか体勢を立て直したドラゴンナイトは、ドラグバイザーにカードをベントインした。

「ソードベント」

「怒るだけでは強くはなれないぞ。」

ウイングナイトもダークバイザーに、カードをベントインした。

「トリックベント」

ドラグセイバーで、ウイングナイトに斬りかかったドラゴンナイトは、次の瞬間、信じられない光景を見た。

ウイングナイトの体が、次々と分裂していく。

これが、ウイングナイトの持つ特殊カード「トリックベント」

の効果「シャドーイリュージョン」だ。

「こんなの汚いぞぉ〜！」 毒づきながらドラゴンナイトは、最寄りのウイングナイトの個体に斬りかかるが、かわされては攻撃されての繰り返しだった。

そのうち、複数の個体からの一斉攻撃をまともくらい、吹っ飛ばされる。

「こんなの卑怯ですよ〜！」

「敵が一人とは限らないぞ。」

ウイングナイトは、別のカードをベントインする。

「ソードベント」

ダークバイザーを腰に戻し、今度はウイングランサーに替える。

「くっそ〜！」

自棄になったドラゴンナイトは、タックルをかけるが、ウイングナイトはスルリとかわすと、足払いをかけた。

派手に転ぶドラゴンナイト。

「スライディングだけは上手いんだな。」

「何だと〜！」

馬鹿にしたようなウイングナイトの物言いに、さすがのドラゴンナイトも、完全に頭に血が上った。

「くっそ〜！」

喚きながら、斬りかかるドラゴンナイトだが、ウイングナイトはウイングランサーで難無く受け止め反撃する。

さつきから、攻撃されてばかりのドラゴンナイトだが、何とか罅を縫い合ひ返持ち込んだ。

暫く押し合いをしていたが、ウイングナイトが競り勝ってウイングランサーを振るい、ドラゴンナイトのドラグセイバーを弾き飛

ばした。

弾き飛ばされた衝撃で右手が痺れ、右手を抑えながら後退ろうとしたドラゴンナイトの胸元に、ウイングランサーの鋭い突きが決まった。

「うぐわあ〜！」

またまた吹っ飛ばされ壁に叩きつけられるドラゴンナイト。

余りの痛さにうずくまるドラゴンナイトに、ウイングランサーを持ち替えたウイングナイトが迫って来る。

「どうした？もう終わりか。」

尚も挑発するウイングナイト。

「うわ〜！」

何とか立ち上がったドラゴンナイトは、雄叫びを上げながら、ウイングナイトに右ストレートを放ったが、ウイングナイトは右手で軽く受け止めた。

何とか振り払おうとしたドラゴンナイトだが、びくともしない。

「この程度か。」

ウイングナイトは、がら空きになったドラゴンナイトの下腹に、蹴りを放った。

「うぐつ。」

腹を抱えたドラゴンナイトは、数歩後退り地面に膝をついてうずくまった。

「今日はこの位にしておこう。」

うずくまるドラゴンナイトを見下ろしながら、ウイングナイトは、過酷な“トレーニング”の終わりを告げた。

“トレーニング”と称した戦闘が終わり、変身を解除した螢一とレオンは、とりあえず一息ついていた。

「あれがトレーニングですか。本当の戦いが思いやられるよ。」  
「訓練すればいい。」

愚痴る螢一に、レンは素っ気なく答えた。

「でも、一体何の為の訓練なんですか？そろそろ教えて下さいよ！」  
螢一は、レンに詰め寄った。

「こんな筈じゃなかったんだが、お前は仮面ライダーになった。」  
「前にも言っていましたよね。俺の事を“仮面ライダードラゴンナイト”だつて。その仮面ライダーって何なんですか？」

「仮面ライダーはベントラの騎士だ。」

「ベントラ？」

「鏡の向こうの世界だ。今さっきまで俺達が居た場所だ。」  
「成る程。」

「ベントラの仮面ライダーからカードデッキが盗まれ、この世界のお前やシザースの手に渡つたんだ。」

「盗まれたんですか。それじゃあ返さなきゃいけませんね。」

半ばふざけた口調で、螢一が言った。

そんな螢一を宥める様にレンが言った。

「持つておくんだ。他のライダーから身を守る為に。」

「他のライダーって、一体仮面ライダーって何人居るんですか？」

「お前と俺を入れて、12人だ。」

「12人！でも、何故俺を狙うんですか？」

「俺の仲間だと思われているからだ。」

「はっ！こりゃ良いや。貴方のお陰で、俺迄悪者扱いですか！」

吐き捨てる様に螢一が叫んだ時、モンスター出現を示す例の音が聞こえてきた。

「丁度良い。トレーニングの成果を試そう。」

「練習試合というわけですか…。」

もうウンザリという感を出しながらも、螢一はレンの後に続い

た。

ライドシューターを降りた二人は、辺りを見回していると、すぐそばの雑居ビルの屋上に居るモンスターを見つけた。

「あそこだ！」

叫ぶと同時に、ドラゴンナイトとウイングナイトは、地面を蹴って飛び上がり、4階の非常階段の踊り場に着地した。

そのまま階段を駆け上がり、屋上に着いたが、モンスターの姿は無い。

「何処に行った。」

呟きながら、辺りを見回すドラゴンナイトの顔を、いきなり後ろから掴まれフェンスに2・3度叩きつけられた。

それを見たウイングナイトが、腰のダークバイザーを引き抜き、モンスターに斬りかかった。

ドラゴンナイトも殴り掛かったが、モンスターはドラゴンナイトの攻撃を軽くかわして、ウイングナイトの斬撃を受け止めた。

「やったなあ。俺も本気を出すぞ！」

ドラゴンナイトは、ドラグバイザーにカードをベントインした。

「ソードベント」

ドラグセイバーを手に、モンスターに斬りかかった。

モンスターは、ドラゴンナイトの斬撃をかわすと、勢い余って前につんのめったドラゴンナイトの背中に蹴りを入れ、ウイングナイトのダークバイザーの斬撃を弾いて、逆に持っていた武器で斬りつけた。

ドラゴンナイトとウイングナイトが、一箇所に固まった所に、モンスターが武器を投げつけた。

二人はそれをかわしたが、その武器はブーメランの様に戻ってきて、二人の背中に当たった。

「でやあ〜！」

ドラゴンナイトが飛び上がって、ドラグセイバーでモンスターを袈裟斬りに斬りつけた。

モンスターは、武器で受け止めようとしたが、ドラグセイバーの一撃は、モンスターの武器を真っ二つに叩き壊し、そのままモンスターを斬りつけた。

すかさず、ドラゴンナイトはモンスターの背後に廻って、後ろから羽交い締めにし、最初の不意打ちのお返しとばかりに、モンスターをフェンスに叩きつけた。

ウイングナイトは、ダークバイザーを開いてデッキからカードを取り出した。

「耳を塞げ！」

ドラゴンナイトに告げたウイングナイトは、ダークバイザーにカードをベントインした。

「ナスティベント」

飛来したダークウイングが、モンスターとドラゴンナイトに超音波攻撃「ソニックブレイカー」を放った。

ドラゴンナイトは、ウイングナイトの指示通りに耳を塞いだから、ダメージは少なかったが、モンスターは、ソニックブレイカーをまともに浴びて怯んだ。

「だったら俺も！」

ドラゴンナイトもドラグバイザーに、別のカードをベントインした。

「アドベント」

ドラグレッダーが現れ、モンスターにドラグブレスを放った。  
ドラグブレスが命中し、モンスターが、その場から逃げ出そうとした。

それを見た二人の仮面ライダーは、同じカードをベントインした。

「ファイナルベント」

各々のモンスターと共に空中に飛び上がり、必殺技の体勢に入る。

「でやあ〜!」

「はあ〜!」

ドラゴンライダーキックとダイビングスラッシュが同時にモンスターに炸裂した。

モンスターを倒し、元の世界に戻った二人。

「中々良いコンビネーションでしたね!面白くなってきた。」

初めて単独でモンスターを倒した時の充実感と快感が蘇ったのか、螢一が興奮しながらレンに言った。

そんな螢一を戒める様に、レンは素っ気なく言った。

「仮面ライダーはモンスターよりも遥かに手強い。まずはカードデッキについて学べ。覚えるべき事は山ほどある。」

「宿題というわけですか?」

「そういう事だ。」

そんな会話を交わし、その日二人は別れた。

次の日、OREジャーナルに出勤した麻弥は、大久保に呼び出された。

「何でしょうか？編集長。」

「実はな麻弥。玲子がお前を借りたといって、昨日言ってきたんだよ。」

「ええっ！玲子さんが！またですか！？」

麻弥が、いかにも嫌気たつぷりの顔で言った。

由良玲子。かつて、大久保が勤めていた新聞社の記者で、大久保の後輩にあたる。

彼女のジャーナリストとしてのキャリアは一流だが、その高飛車な物言いと態度から、社内での評判は、必ずしも良いものではなかった。

以前麻弥は、玲子のアシスタントとして取材に同行したことがあったが、やったことといえば、お茶くみに雑用係といった事だけだった。

「あの人とやると、まともに仕事させて貰えません。お断りします。」

即刻辞退を表明した麻弥を、大久保が宥める様に言った。

「まあそう言うなって。玲子もああ見えて、お前の事気に入ってんだよ。『麻弥は確かに優秀だけど、まだまだ発展途上。私が、しっかりと仕込んで差し上げますわ』だって。」

玲子の口まねをしながら、大久保がおどけた口調で言った。

「わかりました。」

溜め息混じりの返事をする、麻弥は踵を返して出て行った。

待ち合わせ場所に着くと、玲子が厳しい顔つきで待っていた。

「麻弥。20分の遅刻よ！一体何をやってたの！？」

「すいません玲子さん。渋滞に巻き込まれて…。」

「言い訳は結構！まったく、ちよつとネットニュースの記事の評判が良いからって調子に乗ってるんじゃないかしら？」

「いえ。そんな事は…。」 今日始まった、玲子のねちっこい

説教に耐えながら、麻弥は頭の中で思った。

「このババア〜。今に見てるよ〜！」

「はい、小中法律事務所です。いや〜雅史君か。どうだね。その後  
は？」

「昨日赤い仮面ライダーと戦ったけど、その最中に別のライダーに  
横槍入れられたよ。」

「おやおや、辞めるかね？ガードマンの仕事なら斡旋してやるぞ。」

「い、いや。辞めるとは言ってない。ただ、あの赤と黒の仮面ライ  
ダー徒党を組んでやがったぜ。どうすりゃいいんだ？」

「賢くやれ。上手く二人を引き離すんだ。」

「でもどうやって…？やべっ！またかけ直す！」

小中に電話していた須藤は、急いで携帯電話を切り、自分のバイク  
を停めてある道路へ走り出した。

そこには、二人の警官が駐車違反の札を、須藤のバイクに取り  
付けていた。

「このバイクの持ち主？ここは駐車禁止区域だよ。」「ちよつと待  
つてくれよ！ちよつと停めただけだろ！」

「君にとつて、1時間って時間はちよつとかね？はい、免許証出し  
て。」

「いや、だけどさあ…。」「いいから、免許証を出しなさい！」

警官にどやされて、渋々免許証を提示する。

いわゆる“違反切符”を渡された須藤は、その金額を見て息を  
呑んだ。

「ちよつと！駐車違反の罰金って、こんなに高いんかよ！？」

「そつだよ。」

「俺無一文だぜ。こんな額払えねえよ！」

「だったら、親御さんに頼んで用意してもらえ。」  
「そんな事出来ねえよ！俺親に勘当されてんのに。」  
「だったら、しっかり親御さんに頭下げて、真面目に生きるんだな。」

警官は事もなげに言うと、パトカーに乗って走り去った。

「くそっ！」

パトカーを見送った後、須藤は腹いせに、傍らにあった街灯を思いつ切り蹴飛ばした。

「まあ良いさ。あの二人さえ倒せば、一気に4億円手に入る。それで全て片付くさ。」

街灯に蹴りを入れ、それで少し落ち着いたのか須藤はそう呟くと、バイクに跨がって走り出した。

「ソードベント。ストライクベント。ガードベント。アドベント。ファイナルベント。あゝあ、今更カードデッキの勉強って言われてもなあ。」

他力本願寺の自室で、螢一は、ドラゴンナイトのカードを見ながら呟いた。

レンに課せられた“宿題”は、自分のカードデッキの特性を見極める事だ。

ドラゴンナイトのカードデッキに入っているカードは、全部で5枚。

それらのカードの効果は一回の変身につき、一度しか使えないとの事。

そのカードを再び使うには、一旦変身を解除し、再度変身すればいいのだが、戦闘中に、そんな悠長な事などしてられないだろう。

「要するに、ファイナルベントは文字通り切り札として残しておいて、ソードベントとストライクベントを中心に使っていて、後は

俺自身が強くなるしかないって事だよな。」

そんな結論を出した時、モンスター出現の音が聞こえてきた。  
「来たな。」

螢一は立ち上がると、カードデッキとヘルメットを引っつかんで、部屋を出た。

「螢一さん。お茶が入りましたよ。」

途中で、ティーセットを持ったベルダンディーに声をかけられ  
たが、

「ごめんねベルダンディー。帰ったら貰うよ。ちょっと出掛けてくる。」

その場で足踏みをしながら、ベルダンディーに言って家を飛び出した。

螢一が出て行った後、ベルダンディーは暫くその場で、玄関をじっと見つめていた。

傍らで、ウルドとスクルドが声をかけてきた。

「最近の螢一、いくらなんでも変よ。お姉様に隠し事なんて許せないわ！」

スクルドが膨れっ面で言う。

「まさか、この間の桃井麻弥って女と浮気してるんじゃないよ。んも〜  
螢一ったら〜。お姉様という者がありながら〜！」

まくし立てるスクルドを、ウルドが宥める。

「螢一に限ってそれは無いわねえ。いくらなんでも、あいつにそんな器用さがあるとは思えないわよ。」

「でも〜。」

「私は螢一さんを信じています。話せる事であれば、とっくに話して下さっていますから。」

そう言って、二人に笑いかけたものの、その笑顔は、何処か悲しげだった。

螢一が現場に着くと、そこには既にレンが居た。

「レンさん。モンスターは？音が聞こえてきましたけど。」  
「片付けた。」

それだけ言うと、レンは歩き出した。

「あのモンスター達って、一体何なんですか？そろそろ俺にも教えて下さいよ！」

螢一がレンに詰め寄った時、不意にレンが、螢一の腕を掴んで、物陰に引き込んだ。

「どうしたんですか？」  
「奴だ。」

レンが、顎で示した方を見ると、一人の薄いピンク色のポロシヤツにチノパンという格好の若い男がうろつろつしていた。

「誰ですか？あの人。」  
「仮面ライダーシザースだ。」

「シザースって、あの蟹の仮面ライダーの…。でも、どうしてそんな事が判るんですか？」

螢一の問いに、レンがゆっくりと螢一の方に向き直った。  
「俺には判るんだ。」

そう言うと、レンは男の方へ歩き出した。

その若い男・須藤の前に、まず螢一が現れた。

須藤は既に、螢一が仮面ライダーだということを知っているの  
で、螢一に近付いてきた。

「よお。またやりに来たのかよ？」  
「どうかな。」

「んじゃ、やるか？」

須藤は、ポケットからカードデッキを取り出した。そこへ  
レンが近付いてきた。

須藤は、呆れた様子で言った。

「おいおい、またお友達かよ。一人じゃ怖くて戦えないってか!？」

須藤の挑発に、螢一は苦笑しながら、顔を背けた。

すると、レンが思いがけない事を口走った。

「俺とお前で、一騎打ちだ。」

「ちよっとレンさん！」

螢一が叫んだが、須藤はニヤリと笑って、

「ほう、良いねえ。そっちの腰抜けとはえらい違いだ。」

「何だと〜！」

腰抜けと言われ、カツとなった螢一だが、

「螢一。引っ込んでろ。」 と、レンに言われ、渋々引き下がった。

レンと須藤は、近くにあった窓ガラスに、それぞれのカードデッキを翳した。Vバツクルが出現し、腰に装着される。

「変身！」

変身が完了した二人は、そのまま窓ガラスに飛び込んだ。

ウイングナイトは、腰からダークバイザーを抜き、構えた。

「ほほ。カッコイイねえ。二億円に相応しい勇姿だぜ〜！」

そう言うと、シザースはシザースバイザーを振るって向かってきた。

ウイングナイトは、シザースの攻撃をかわし、或いはダークバイザーで受け止めながら、反撃する。

不意にシザースのローキックが、ウイングナイトの左膝に当たり、ウイングナイトは膝をついた。

すかさずシザースは、ウイングナイトの背後に廻って、ウイングナイトの首を絞めた。

「へっへえ。二億円は貰ったぜえ〜！」

早くも勝どきの声を上げたシザースだが、その隙について、ウイングナイトはダークバイザーにカードをベントインした。

「ナスティベント」

空の彼方から、ダークウイングが飛来し、シザースにソニックブレイカーを放った。

「うわ〜！」

シザースは、耳を塞いで疼くまいった。

ウイングナイトは立ち上がって、シザースの方を向くと、再びダークバイザーを構えて間合いを取った。

「くそつたれがあ〜！」

ソニックブレイカーのダメージから立ち直ったシザースは、ウイングナイト同様に間合いを取った。

お互いの距離が5メートル程あいた場所で、二人は数歩横歩きをした後、再び間合いを詰め、交戦した。再度間合いを離れたウイングナイトは、ダークバイザーにカードをベントインした。

「ソードベント」

ダークバイザーを腰に戻し。ウイングランサーを手にしたウイングナイトは、積極的に攻める。

何度目かのウイングナイトの攻撃で、ウイングランサーの突きが、シザースの胸元に直撃した。

「うがぁ〜！」

吹っ飛ばされ、柱に激突したシザースは、シザースバイザーにカードをベントインした。

「ストライクベント」

互いのメインウェポンを出した二人は、幾度となく切り結んだ。しかし、徐々にウイングナイトの方が押されだし、シザースの攻撃で、少しよろめいたウイングナイトの右足に、再びシザースのローキックが決まり、また、ウイングナイトは膝をついた。

今度は、シザースピンチの罅で、ウイングナイトの首を絞めようとしたが、寸前で、ウイングナイトはウイングランサーで受け止めた。

「へっへっへ。その首ちょん切つてやるぜえ〜！」

またも、有利な状況になったシザースだが、そのから空きになったシザースの腰に、ダークバイザーで斬りつけた。

「ぐわっ！」

後退ったシザースを見て、ウイングナイトは、ダークバイザーにカードをベントインした。

「ファイナルベント」

それを見たシザースも、カードをベントインした。

「ファイナルベント」

空中へ飛び上がったウイングナイトの背中に、ダークウイングがマントとなつて合体し、ダイビングスラッシュの体勢になった。

一方、シザースの後ろの地面から、蟹のモンスター「ボルキャンサー」が現れた。

それを見たシザースは、ボルキャンサーの前で軽くジャンプすると、ボルキャンサーが、両手の罅でシザースを上弾き飛ばした。弾き飛ばされたシザースは、空中で体を丸めて上昇する。

シザースの必殺技「シザースアタック」だ。

空中で、二つの必殺技がぶつかり合い、大爆発が起こった。

必殺技の撃ち合いは、シザースが競り勝つたらしく、ウイングナイトが倒れ伏していた。

「俺の勝ちだあ〜！」　　そう言ったシザースの体に、異変が起きた。

シザースの肩が、煙りの様に消えていったのだ。

「おいっ。何だこれ。どうなってんだよ！」

叫ぶシザースの声色に、段々と恐怖の色が出てきた。

「い、嫌だ。こんなの……。だ、誰か〜！パパ〜！助けてくれ〜！」

助けを求める声も虚しく、シザースとボルキャンサーの体は、跡形もなく消えていった。

ウイングナイトは、後に残ったシザースのカードデッキを拾い上げ、それを見つめながら、暫くその場に佇んでいた。

溶ける様に消えたシザーズを見て、螢一は茫然としていた。

変身を解除し、鏡から出てきたレンに気付いた螢一は、ハッと我に返ると、レンの後を追った。

「レンさん。あいつ一体どうなったんですか？」

「あいつはベントされたんだ。」

「ベント？何ですか、それ？」

「飛ばされたんだ。ベントラと、この世界の狭間にある空間、アドベント空間にな。」

「アドベント空間…。」

レンの言葉を、おうむ返しに呟く螢一。

「それで、そのアドベント空間からはいつ戻るんですか？」

「戻れない。一度アドベント空間に飛ばされたら、二度と戻れない。」

「とんでもないレンの話しに、螢一は絶句した。

「仮面ライダーが敗れるとああなるんだ。だから、戦いには負けられないんだ！」

「そう言い放つと、レンは立ち尽くした螢一を残し、バイクで走り去った。」

その螢一とレンのやり取りを、離れた場所から赤いバイクで見ていた男がいた。

レンが走り去ったのを見ると、その男もバイクで走り去った。

「ただいま。」

「お帰りなさい。螢一さん。」

他力本願寺に戻った螢一を出迎えたベルダンディーは、真っ青な顔の螢一を見て、息を呑んだ。

「螢一さん、どうなさったんですか？顔色が真っ青ですよ！」

「何でもないよ…。ベルダンディー。」

「でも…。」

「ごめん。暫く一人にしてくれないか。」

「はい…。わかりました。」

螢一は、そのまま自室へ続く廊下を、とぼとぼと歩いて行った。途中で風呂から上がったばかりのウルドとスクルドと、鉢合わせした。

「ちよつと螢一！あんた大丈夫なの？」

ウルドが、螢一の肩を掴みながら言った。

「ああ。大丈夫だよ。ごめん、暫く一人にしてほしい。」

「螢一…。」

肩に乗っていたウルドの手を離すと、螢一は自室に入った。

「ちよつと待ちなさいよ！どういう事が説明しなさいよ！」

凄い剣幕で螢一を追おうとしたスクルドを、ウルドが止めた。

「止めなさいスクルド。今はそつととしてあげましょう。」

「でも！」

「スクルド！」

珍しく強い口調で窘めるウルドに、スクルドは、納得いかないという表情を出しながらも、その場は引く事にした。

部屋に戻った螢一は、勉強机の前の座布団に座ると、ポケットからカードデッキを取り出し、それを見つめていた。

その間頭の中には、さっきのシザースがベントされた光景が、何度もしりフレインした。

すると、またもモンスター出現の金切り音が鳴った。

咄嗟に螢一は、カードデッキをゴミ箱に放り投げ、頭を抱えて

疼くまった。

「もう嫌だ。」

今度戦って、もし負けたら、自分もあんな風になる。

嫌だ。

怖い。

そんな恐怖心が、次から次へと沸き上がり、螢一を責めさいなんだ。

しかし、どれだけ恐怖で心を支配されても、“モンスターに襲われた人達を助けたい”という気持ちと勇気が、螢一を突き動かした。「これで最後だ。」

螢一は立ち上がって、ごみ箱に捨てたカードデッキを拾い上げると、机の上にある障子を開け、窓ガラスにカードデッキを翳した。

「変身！」

ドラゴンナイトに変身し、窓ガラスに飛び込むと、ライドシューターに乗り、デイメンションホールを進んで行った。

デイメンションホールを抜け、ライドシューターを降りると、目の前に、全身が青色の百足の様な顔のモンスターがいた。

「よし、行くぞ！」

気合いを入れたドラゴンナイトは、モンスターに殴りかかった。モンスターは、背中に背負ったブーメランの様な武器を取り出すと、ドラゴンナイトを迎え撃った。

モンスターが、武器を使って攻撃してくるので、ドラゴンナイトもドラグバイザーにカードをベントインした。

「ソードベント」

空中からドラグセイバーが現れ、ドラゴンナイトの下に落下してきたが、何とモンスターは武器を投げつけ、ドラグセイバーを弾き飛ばした。

「ああっ！何するんだよ！」

ドラゴンナイトが叫んだが、モンスターは武器をキャッチして横薙ぎに振るってきた。

ドラゴンナイトは、それを前転してかわし、再度横薙ぎの攻撃をしてきたモンスターの武器を両手で受け止め、がら空きになったモンスターの横腹に、二度膝蹴りを入れた。

疼くまったモンスターの横っ面に、今度は渾身の力を込めた廻し蹴りを放った。

人の顔で言えば左頬にあたる部分に、見事に廻し蹴りがヒットし、モンスターは空中で何度か回転しながら、地面に叩きつけられた。

「おお。今のはかなり効いたんじゃない？」

と、得意げに言うのと、ドラゴンナイトはドラグバイザーに、カードをベントインした。

「ストライクベント」

空中からドラグクローが現れ、落下してきたが、またもやモンスターは、武器を投げつけた。

しかし今度は、ドラゴンナイトは高々とジャンプし、モンスターの武器を叩き落とすと、空中でドラグクローを装備した。

「同じ手は、二度も使えるかよ！」

ドラグクローを軽く叩きながら、ドラゴンナイトはモンスターに向かって行った。

左手で、モンスターの攻撃を受け止め、そのままモンスターの腕を、左の小脇に抱えて動きを封じ、ドラグクローを付けた右手で何度もモンスターを殴りつけた。

そして、渾身の力を込めたドラグクロー付き右ストレートが、モンスターの左頬に決まったと同時に、小脇に抱えていたモンスターの右手を離したので、モンスターは、大きく吹っ飛ばされた。

「これで終わりだ！」

ドラゴンナイトは、モンスターにドラグクローファイヤーを放ったが、モンスターはギリギリでそれをかわして、その場から逃げ去った。

「ああつ。待て！」

結局、モンスターは逃げきってしまった様で、ドラゴンナイトは地団駄を踏みながら、元の場所に戻った。

その様子を、離れた物陰から見ていた者がいた。

全身が緑色のアーマーを纏った、螢一やレンと同じ仮面ライダーだった。

変身を解除し、そこに居たのは、さっき螢一とレンのやり取りを見ていた赤いバイクの男だった。

「あれが仮面ライダードラゴンナイトか。」

そう呟いた男は、近くの鏡の中に消えた。

猫実市内から南へ下った湾岸沿いにある工業プラント。

この工業プラントには、今は使われていない地下空間が広がっている。

広さは、ざっと学校のグラウンド5つ分位の広さだ。

その広大な空間に、巨大な宇宙船の様な物体があった。

その宇宙船とおぼしき物体の中にある、ブリッジと思われる広いフロアーの一角にある扉が開き、そこから全身が真っ黒の異形の

モンスターが入って来た。

そのモンスターが、フロアーの中にある大きなリングの中を通った時、人間の姿へと変わった。

黒のトレンチコートに、黒のスラックスという黒づくめの恰好をしたその人物は、仮面ライダーシザース・須藤雅史に、カードデッキを渡した人物だった。

この人物こそ、レンの故郷ベンタラを滅ぼし、今はこの地球を侵略しようとしている者、ゼイビアックスその人である。

ゼイビアックスは、傍らで恭しく頭を下げている人物に、声をかけた。

「いや、おはよう北岡君。ご機嫌はいかがかなあ？」 北岡と呼ばれた人物が、頭を上げる。

その人物は、あの緑の仮面ライダー・ゾルダに変身する男だった。

「おはようございます將軍。実を言つと、貴方の侵略計画の中で一つ不明な点があります。」

北岡が、慇懃な口調で疑問点を言う。

「ほう。何が不明なのかね？私は、我が故郷の星、カーシュを再建するための奴隷として地球人を全て拉致し、君は私に協力する報酬として、優雅な生活を手に入れる。それが君との契約内容だ。それについて何かあるのかね？」

「俺がわからないのは、誘拐の方法です。今貴方は、モンスターを使って一つずつ人間を誘拐している。何故そんな非効率的なやり方をするんですかね？これでは、優雅な生活をすぐに始められません。」

「何だ。そんな事か。それなら心配いらぬ。見たまえ。」

ゼイビアックスは北岡を、フロアーにあるリングの一つを見るように促した。

リングの一つがスクリーンになり、一つの街が映し出された。そこには、街を行き交う人間が映し出され、その内の何人かがズームアップされ、その人間の何らかの数値を示す数字や記号が浮かび上がった。

「私は今、人類のDNAサンプルを集めている。収集率は70%とあったところだ。その特定のDNAサンプルを集めて解析し、現在開発中のレポートシステムにデータ入力すれば、後はボタン一つで、人類は私の物だ。」

得意げに計画を解説するゼイビアックスの横で、北岡は俯いて黙り込んでいる。

「何だ。今更罪の意識を感じているのか？」

低いドスの効いた声で、ゼイビアックスが言った。

「いいえ。何処に住もうか考えてたんですよ。ホワイトハウスかエリーゼ宮か。日本人らしく皇居に住むのも良いかと思ひまして。」

北岡が、涼しい顔で言った。

次の日、麻弥は螢一を訪ねて他力本願寺へやって来た。

螢一は、そこで初めてベルダンデー達に、桂馬が行方不明になつてから今日迄の事を話した。

特に、螢一が仮面ライダーとなつて戦っている事、もし戦いに負けたら、アドベント空間に飛ばされ、二度と戻れなくなるという話で、全員の顔から表情が消えた。

特にベルダンデーは、今にも失神してしまいそうな様子だ。

「螢一。あんた、そんな危険な事をやってたの？」

ウルドが苦虫をかみつぶした様な顔で言った。

「ああ。でも、まさかこんな事になるなんて思わなかったんだ。」

螢一も真つ青な顔で言った。

「仮面ライダーシザーズは、凄く嫌な奴だったんだ。嫌な奴だった

けど、彼は俺と同じで普通の人間だったんだ。それなのに……。」

「森里君が負けたら、その……。ベントされるんだね？」

麻弥も心配げに言う。

「俺が勝つたら相手がそうなるんだ。もう無理だ。」　　螢一が、頭を抱えて俯く。

「螢一さん。もう関わらないで下さい。螢一さんの身にもしもの事があつたら、私は……。」

ベルダンディーが、螢一の手をとって懇願する。

「わかつてるよ。ベルダンディー。」

螢一が、ベルダンディーの手を握り返した。

すると、玄関の方でインターホンが鳴った。

「私出ますね。はい。」　　ベルダンディーが立ち上がって玄関の戸を開けると、そこには、サングラスをかけた男・レンが居た。

「こんにちは。どちら様でしょうか？」

「森里螢一は居るか？」

「はい、螢一さんならいらっしやいますが、螢一さんのお知り合いの方ですか？」

「そうです。」

居間から、螢一が出てきた。

「レンさん。」

「螢一。話があるんだ。」

「俺も、レンさんに話があるんです。」

螢一に続いて、居間からウルド・スクルド・麻弥も出てきた。

「螢一さん。こちらの方はどなたですか？」

「この人が、さっき話したベンタラの仮面ライダーで、レンさんだ。」

螢一に紹介され、レンは一同に軽く頭を下げた。

「折角ですから、上がってお茶でもお飲みになってください。」

「いや。直ぐに帰る。ここで良い。」

ベルダンディーの申し出を断ったレンは、再び螢一に向き直った。

螢一はとりあえず、レンを縁側に連れて行った。

螢一とレンの後に、ベルダンディー達も続いた。

縁側につくと、レンが話しを切り出した。

「昨日の事なんだが、俺も、仮面ライダーをベントしたのは、あれが初めてだったんだ。」

「その事なんですけど、レンさん、やっぱりこれ返します。」

螢一はポケットからカードデッキを取り出すと、レンに差し出した。

「ベントされたくないし、するの嫌です。すみません。」

再度レンにカードデッキを差し出したが、レンは首を横に振った。

「折角だが、そのカードデッキは、もう受け取れない。」

「ええっ！どうしてですか？」

「だから俺はドラグレッダーとの契約を止めたんだ。モンスターとの契約は永遠に続く。カードデッキが無効になるのは、お前が負けた時だ。」

「ベントされた時か。くそ！何で桂馬さんは、俺にこんな事させたんだ！」

そう言っただけで、縁側の柱の一つを、思いっきり殴りつけた。

その様子を、傍らで見ていたベルダンディー達は、激昂した螢一を見て、体を震わせた。

「いいか。お前を巻き込みたくなかったんだが、こうなっては手遅れだ。力を貸してほしい。」

「力を貸すって、一体何にですか？」

螢一が聞き返した時、モンスター出現の金切り音が聞こえた。

「来てくれ。」

それだけ言うと、レンは足早に自分のバイクを停めてある場所

へむかった。

螢一は、カードデッキを強く握り締めたまま、少しの間俯いていたが、やがて意を決した様に顔を上げると、カードデッキをポケットに入れ、自室へと向かった。

部屋に戻って、バイクの鍵とヘルメットを取り、玄関で靴を履いて出ていこうとした螢一を、ベルダンディーが引き留めた。

「螢一さん。」

「ベルダンディー。心配してくれて凄く嬉しいんだけど、モンスターに襲われている人達を放ってはおけないよ。だから、行かなきゃ。」

「でしたら、私も連れて行って下さい。」

「ええっ！でも…。」

「お願いします！少しでも螢一さんのお役に立ちたいんです。」

「ベルダンディー…。」

螢一を真っ直ぐに見つめ、懇願するベルダンディー。

暫く見つめ合っていた二人だが、やがて、やれやれといった感じで、螢一が言った。「言っても無駄みたいだね。わかったよ、ベルダンディー。」

「はい！」

大輪の花が咲いたような笑顔を浮かべたベルダンディーは、螢一の後が続いた。

「私達も行くわよ。スクルド。」

「もちろん！」

「私も行きます。」

ウルド・スクルド・麻弥も後に続いた。

一行が向かったのは、猫実市でも有名な心霊スポットとして知られる、町外れにある廃墟と化した古い病院だった。

現場に着くと、正面口に、先日螢一が取り逃がしたモンスター・アスロックスがうろうろしていた。

「あれが、モンスター。」「何あれ！気持ち悪い。」

「あんな奴がいるなんて。」

女神達が、口々に悪態をついた。

来る途中、螢一が女神達に、カードデッキを触らせた事で、女神達にもモンスターが見える様になったのだ。

もつともそんな事をしなくても、感覚の感度をあげたり、螢一の意識とシンクロして、感覚を共有するという方法等で見る事が出来るのだが、螢一があえてそのようにしたのである。

アスロックスは、螢一達の姿を見ると、逃げる様に割れた玄関の窓ガラスに飛び込んだ。

一行は、入口付近で停まった。

レンは、ヘルメットのシールドを上げ、螢一もゴーグルを外した。

「レンさん！あいつ逃げましたよ。追わないんですか!？」

螢一は、慌ててレンに聞いたしたが、レンは至極落ち着いた口調で言った。

「新しい技を教えてやる。ついて来い。」

レンは、ヘルメットのシールドを下げると、カードデッキを翳した。

「変身！」

掛け声と共に、Vバックルにカードデッキを装填すると、アクセルを吹かしてタイヤを軋ませながら、バイク毎窓ガラスに突っ込んだ。

螢一達は、暫し茫然としていた。

「バイクでも行けるのか…。よ〜し!。」

気合いを入れた螢一は、ゴーグルをかけ直すと、カードデッキを翳した。

Vバツクルが出現し、腰に装着される。

「ベルダンディー。悪いけど降りてくれないか。」 螢一は、側車に乗っているベルダンディーに声をかけた。

「えっ！でも螢一さん…。」

困惑した顔で、ベルダンディーは螢一を見つめた。

「レンさんも居るし、俺は大丈夫。だから心配しないで。ね！」  
優しく笑いながら、螢一は言った。

ベルダンディーは、尚も螢一を見つめていたが、螢一の瞳に、強い意志を秘めた光が宿っているのを見て、素直に従った。

「はい。螢一さん、どうかお気をつけて。」

胸の前で手を組みながら、ベルダンディーは言った。

「うん。行ってくるね…。変身！」

掛け声と共に、Vバツクルにカードデッキを装填すると、螢一もレンと同様にバイク毎突っ込んでいった。

螢一とレンが消えた後のドアを見ていたベルダンディーの肩に、ウルドがポンと手を置いた。

「さあ、私達も行くわよ。ベルダンディー！」

「姉さん。」

「螢一を助けにね。」

ウルドは、ウインクしながら言った。

「はい！」

笑顔で返事をするベルダンディー。

ベルダンディー・ウルド・スクルドは、胸の前で手を組むと、着ている服が、瞬く間に戦闘衣に変化した。

「さあ、行くわよ！」

「ええっ！」

「螢一さん。今行きます！」

ウルドを先頭に、ベルダンディー・スクルドも、窓ガラスに飛

び込んだ。

後に残された麻弥は、更に茫然とした表情で佇んでいた。

デイメンションホールを、各々のバイクで進む螢一とレン。

その途中で、ドラゴンナイトとウイングナイトに変身し、バイクも、それぞれのライダーマスクを模したマシン、ドラグサイクルとウイングサイクルへと変化した。

デイメンションホールを抜けて一度停まると、ウイングナイトがドラゴンナイトに声をかけた。

「悪くないだろ？」

ドラゴンナイトは、興奮した口調で言った。

「凄いや！仮面ライダーって、こんな力もあるんだ！」

「そういう事だ。」

そこへアスロックスが、最初に麻弥を襲ったモンスター・レッツドミニオンを複数匹率いて現れた。

それを見た二人の仮面ライダーは、頻りにアクセルを吹かして、準備を整えていた。

「行くぞ螢一！」

「はい！」

戦いの火蓋が、切って落とされた。

一方、螢一戦い達に遅れて到着したベルダンデー達は、螢一の波動を頼りに現場へ向かっていた。

「お姉様。ウルド。あれ！」

スクルドが目敏く現場を見つけ、二人の姉に声をかけた。

見ると、さっきのモンスターと、暗い赤色のモンスター、そして赤と紺のバイクに乗った人物が戦っていた。

「あの赤いバイクに乗ってる人が、螢一さんです。」　　螢一の波

動を感じ取ったベルダンデーが、指を指しながら言った。

二人の仮面ライダーは、巧みにバイクを操りながら、赤色のモンスター・レッドミニオン達を攻撃している。

その華麗な舞いを舞うような戦い振りに、女神達は、暫し見とれていた。

主にバイクによる体当たり攻撃で、一旦レッドミニオン達を全滅させたが、新たに何匹かのレッドミニオンが現れ、そのうちの一匹が、背中に背負った十字型の大きな武器を取り出し、バイクで走っているドラゴンナイトとウイングナイトに投げつけた。

武器が命中し、二人はバイクから落ちたが、受け身をとって、直ぐに体勢を立て直した。

「二手に分かれるぞ。」

「はい！」

ウイングナイトは、腰のダークバイザーを引き抜いて構えた。

「ソードベント」

ドラゴンナイトも、ドラグセイバーを手に、モンスターに向かつて行った。

ウイングナイトは勿論、ドラゴンナイトも、手際よくレッドミニオン達を倒していき、最後の一匹を倒したところで、アスロックスが、武器を振るって襲い掛かってきた。

先ずウイングナイトが、ダークバイザーで迎え撃ち、ドラゴンナイトが、アスロックスの側面や背後から切りつけるといった戦法で、徐々にアスロックスを追い詰めていった。

そのうちアスロックスは、二人から間合いを離し、壁際迄走ったと思うと、壁を蹴ってジャンプし、武器を振るって二人に切り掛

かったが、二人はそれをかわし、左右からアスロックスの背中を切り付けた。

地面に叩きつけられたアスロックスは、戦意を無くしたのか、そのまま逃げ出そうとした。

「逃がすか！」

ドラゴンナイトとウイングナイトは、同じカードをベントインした。

「ファイナルベント」

空中高く飛び上がり、必殺技の体勢になる。

「はあ〜！」

「でやあ〜！」

ドラゴンライダーキックとダイビングスラッシュが同時に命中し、大爆発が起きた。

「やりましたね。レンさん。」

「ああつ。そうだな。行くぞ。」

「はい。」

ドラゴンナイトとウイングナイトは、軽く握手を交わすと、近くにあるガラスに飛び込んだ。

二人の仮面ライダーの、鮮やかな戦い振りに見とれていたベルダンディー達も、我に返ると、後を追った。

「皆さん。お疲れ様〜。」 一人残されていた麻弥が、帰還した螢一達を迎えた。

「ありがとう。螢一、良くやったな。」

「いえ。レンさんが居たんで、なんかちょっと安心しながら戦えました。」

「そうか。そう言ってもらえると助かる。」

螢一とレンが、そんな話しをしているところへ、ベルダンディ達も戻ってきた。

「螢一さん。大丈夫ですか？何処もお怪我はありませんか？」

「ああ。大丈夫だよ。ごめんね、心配かけて。」

螢一と女神達のやり取りを見ていたレンが、突然何かの気配を感じたのか、辺りを見回した。

「レンさん。どうしたんですか？」

レンのただならぬ気配を感じた螢一は、声をかけた。

レンは、尚も辺りを見回していたが、窓ガラスの一つに視線を止めると、突然叫んだ。

「ゼイビアックス！」

驚いた一同は、レンの視線の先を見ると、窓ガラスの一つに、全身が真っ黒の異形のモンスターが映っていた。

レンは、カードデッキを取り出すと、モンスターが映っている窓ガラスに駆け寄ったが、そのモンスターは、レンの姿を見ると姿を消した。

「くそ！向こうからブロックされた。」

レンは、窓枠の一つを一殴りすると、停めてあるバイクの方へ歩き出した。

「レンさん。さっきのは一体…。」

螢一が聞いた。

「あれはゼイビアックス将軍。ベンタラを滅ぼした奴だ。」

「ベンタラを…。」

レンの言葉に、思わず螢一が声を上げた。

「ゼイビアックスはエイリアンだ。仮面ライダーは元々奴と戦っていたんだ。だが俺達、ライダーの一人が裏切った。そいつが不意打ちして次々とカードデッキを奪っていったんだ。俺以外は全員ベントされた。」

思いがけないレンの話しに、一同は絶句した。

「ゼイビアックスは次に、地球を狙ってるんだ。その先兵として、奪ったカードデッキで仮面ライダー軍団を作り上げているんだ。」

「仮面ライダー軍団…。」「だから力を貸してほしい。」

「ベントするんですね。」「ああ。やるしかないんだ。この地球迄失いたくなければな。」

「無理ですよ。いきなり地球とかって言われても…。俺はただ、桂馬さんを、父さんを探したいだけなんだ。」

「そうよ！大体螢一は人一倍人と争うのが嫌いな優しい奴なんだよ！その螢一を戦わせるなんて。あんたたちの戦いに、螢一を巻き込まないでよ！」

螢一が呟き、スクルドが抗議の声を上げた。

「父親が、どうかしたのか？」

レンが、心底鬱陶しそうに聞いた。

「二週間程前から行方不明なんです。何の手掛かりも無い…。」

螢一は、ポケットから、麻弥に貰った行方不明者のリストを取り出し、レンに見せながら力無く呟いた。

「わかるよ。俺も先の戦いで、大切な人を失ったからな。」

リストを螢一に返しながら、レンは、慰めるように言った。

「レンさんも大切な人を…。」

「ああ。」

螢一は、レンを見つめると、少し俯いた。

暫し沈黙が流れる。

「これが、運命だったのかもしれないね。」

俯きながら呟いた螢一は、やがてゆっくり顔を上げると、レンに向かって力強く宣言した。

「俺もやります。レンさん！貴方と一緒にゼイビアックスと戦う！」

「螢一さん！」

螢一の宣言に、ベルダンディーが、驚きの声を上げた。

「ごめんねベルダンディー。でも、今は戦うしかないんだ。」  
「でも、それでは螢一さんが…。」

何か言いかけたベルダンディーを、螢一は強く抱きしめた。

「大丈夫。大丈夫だから。」

「螢一さん…。」

ベルダンディーの瞳から、涙が溢れ出して、螢一の肩を濡らした。

その様子を見ていたレンが、改めて問い掛けた。

「本当に良いんだな？螢一。」

「はい！」

螢一はベルダンディーを離すと、レンに向き直り、力強く頷いた。

レンの表情が、一気に和らいだ。

「ありがとう。二人なら、きっと出来る！」

螢一とレンは、固く握手を交わした。

その上に、ウルド・ベルダンディー・スクルドが、手を乗せた。

「レンさん。私達も何かお手伝いをさせてください。」

「ベルダンディー！」

「良いのか？」

「はい。螢一さんの為です。何でもおっしやって下さい！」

「私も協力させてください。」

麻弥も名乗りを上げた。

「ありがとう。感謝する。」

レンは、お礼の言葉を述べると、螢一の手を離した。

「行こう。世界を救うぞ！」

「それ俺の台詞ですよ。」 螢一がふざけた口調で言った。

「ふふっ。早い者勝ちさ。」

レンも、おどけた口調で言った。

こうして、二人の仮面ライダーの、過酷な戦いが始まった。

Vol. 8 (前書き)

こんにちは。今回の話しなんです。通常は仮面ライダードラマゴンナイトの話しを基にストーリーを展開していますが、この話しに限っては、まったくのオリジナルストーリーなんで、完成度は、かなり低いですが、その辺りは御自愛して頂けたらと思います。

では、どうぞ！

仮面ライダーとしての生き方を宣言した螢一のそれからの生活は、かなり様変わりした。

暇を見つけては、体を鍛えたり格闘技の勉強をしたりと、中々忙しく動いている。

元々螢一は、田宮や大瀧が自動車部に居た頃から、たまに自主的にすることもあったが、大半は半ば無理矢理筋トレをやらされていたので、スラツとした体格の割に中々引き締まった体をしている。

それでもレンに言わせると、まだまだ鍛える必要があるとのこと。

螢一の仮面ライダー宣言の後の生活は、毎朝5時頃に起きて持久走に向かい、日中は、パワーストとパワーアングルを付けながら、ワールウインドでの仕事をこなし、他力本願寺に帰った後は、大体の時間を体を鍛える事に使っている。時々レンが訪ねて来たときは、仮面ライダーに変身して、実戦さながらの組み手を行っている。

これに、麻弥と会って、桂馬に関する情報収集や、モンスター退治と、まさに多忙を極める毎日を送っている。

一方女神三姉妹、特にベルダンディーは、多忙を極める螢一が少しでも安らかな一時を過ごせる様に、前にも増して心を砕きながら、螢一の世話をしている。

日常の螢一の世話や、ワールウインドでの仕事に加え、トレーニングやレンとの稽古、そしてモンスター退治で生傷が絶えなくなつた螢一の手当てと、ベルダンディーも、右へ左へと動き回っている。

そんなある日、螢一はいつものように、他力本願寺の自室で、ベルダンディーの手当てをうけていた。

「はい。もういいですよ、螢一さん。」

「ありがとうベルダンディー。ごめんね。いつもこんな事させて。」

「いいえ。気にしないで下さい。螢一さんには、少しでも元気でいてほしいんです。」

「本当にありがとう。ベルダンディー。」

そう言って螢一は、ベルダンディーの体を抱き寄せた。

暫くそのまま抱き合っていた二人は、やがてどちらかともなく体を離れた。

「螢一さん。私、夕飯の買い物に行ってきますね。」「ああ。気を付けてね。」「はい。行ってきます。」

ベルダンディーが出て行った後、螢一は一つ溜め息をつき、このところずっと思っていた事に、考えを廻らせていた。

ゼイビアックスとの戦いの中で、必ずついてまわってくるのが、その配下の仮面ライダーとの戦い。

それらの戦いに敗北すると、ベントされ、この世界から消えてしまう。

螢一の中では、ベントする・されるということは、殺人と同じ行為だと認識している。

自分はこれから、命を奪うに等しい事をする。

それは、既に覚悟しているから良い。

だが、ベルダンディー達はどうかだろう。

ベルダンディー達は、人を幸せにするために存在するお助け女神だ。

彼女達を、今迄通り自分の傍に居させて良いのだろうか。

だけど…。

そんな考えが、螢一の頭の中で、ハツカネズミの様に廻っていた。

螢一の部屋から出て、みんなのティールームに向かう途中、ベルダンディーは、廊下でウルドと鉢合わせした。

「随分と思い詰めた顔してるわね。ベルダンディー。」

「姉さん。私は一級神二種非限定の女神でありながら、螢一さんの運命を変える事が出来なかった。一つの恒星系をも破壊する程の力を持っているのに、私が螢一さんに来る事と言えば、身の回りのお世話をする事だけ。今だから、これ程迄に自分の力の無力さを感じたことはありません。」

「あまり、思い詰めないことね。いくら女神とは言え、私達はここまで万能な存在ではないわ。」

「でも…。どうして螢一さんなんですか！？ユグドラシルに選ばれて、幸せになれるはずの螢一さんが、どうしてこんな残酷な運命を背負わなければならないんですか！？こんなあんなまりです。」

突然火がついた様に泣き出し、その場に崩れ落ちたベルダンディーを、ウルドが抱き留めた。

「ちよつとベルダンディー。螢一に聞こえるわよ。とりあえず、ここに来なさい。」

ウルドは、ベルダンディーを、みんなのティールームに入るように促した。

「お姉様。どうしたの？」　ベルダンディーの泣き叫ぶ声に、隣の部屋に居たスクルドが顔を覗かせた。

「これでは、螢一さんがあまりにも可哀相です。出来る事なら、私が変わってあげたい。」

「ベルダンディー…。」

「お姉様……」

ウルドは、子供の様に泣きじゃくるベルダンディーを優しく抱きしめ、スクルドも、二人の姉に覆いかぶさる様に抱きしめた。

「聞きなさいベルダンディー。あなたの気持ちは痛い程分かるわ。

私も同じ気持ちだもの。でもね、人の人生って、絶対に肩代わり出来ないものなの。家族・友達・恋人・夫婦であっても。勿論私達女神でもね。だから人は、心を砕いて、その人と心を通わせようとするの。絆を結ぼうとするのよ。」

「姉さん……」

涙目で、ベルダンディーはウルドを見つめた。

「確かに螢一にしてあげることは少ないのかもしれない。だからこそ、まず、してあげられることを精一杯やれば良いの。そして、少しずつ螢一の為に出来る事を探しましょう。でも一番大切なのは、螢一の傍に居て、たとえあいつがどんな事になっても、最後までその生き様を見届けてあげる事なのよ。」

ウルドが、確信を秘めた口調で言った。

「お姉様頑張ろう！螢一の為に、私も頑張る！」

スクルドも、胸を張って宣言した。

「姉さん。スクルド。ありがとう。」

涙でクシャクシャになったベルダンディーを真ん中にして、女神三姉妹は、暫く抱き合っていた。その様子を、障子の向こうで聞いていた螢一は、三姉妹に気づかれない様に、その場を離れた。「やっぱり、彼女達を巻き込んだじゃ駄目だ。」

次の日、ワールウインドでの仕事が終わわり、螢一はいつものように、他力本願寺で、ベルダンディーの作った食事を食べていた。

食事が終わり、台所で洗い物をしていたベルダンディーに、螢

一が声をかけた。

「ベルダンデー！」

「はい。何でしょう?」

「洗い物が済んだら、話しがあるんだ。後で本堂へ来てほしい。」

「本堂…ですか?」

「うん。大事な話なんだ。ウルドとスクルドと一緒に来てくれ。」

「はい。わかりました。」　それだけ言うと、螢一は出て行った。

螢一は、本堂の階段に腰掛けて、三人が来るのを待っていた。

程なくして、三人がやって来た。

三人は、いつもと違う螢一のただならぬ気配に、半ば緊張の赴きでいた。

「螢一。私達に話って何?」

スクルドが、話しを切り出した。

暫し間を置いて、螢一が口を開いた。

「変な前置きは苦手だから、単刀直入に言うよ。ベルダンデー！君との間に交わした契約を解除して、天上界に帰ってほしい。」

思いがけない螢一のセリフに、三人は絶句した。

「そんな…。螢一さん。」「何よそれ!どうしてそんな事言っわけ!?!お姉様が必要なくなったの!?!」

ベルダンデーが、その場に崩れ落ち、スクルドが、抗議の声を上げた。

「俺はこれから、自分の手を血で染める事になる。そういう道を歩むって決めたから。でもその事に、君達を関わらせるわけにはいかない。」

「確かに私は、螢一さんとの契約という形でここに居ます。でもそれ以上に、私は、私自身の意志でここに居るんです!どんな事があっても、私は貴方のお側に…。」

「駄目だ!」

思いを告げようとしたベルダンディーを、螢一は、これまでにない強く厳しい口調で遮った。

「君達はお助け女神。人を幸せにするために存在するんだろ？そんな君達に、悪事の片棒を担がせる様な事をさせるわけにはいかない！」

「でも！」

「やめなさいベルダンディー。」

それまで黙って話を聞いていたウルドが、口を開いた。

「契約者である螢一が、契約解除を申し出たら、どんなことがあっても受理しなければならない。それは、あんた自身がよく分かっているでしょ？」

「ウルド！」

スクルドが、ウルドを怒鳴った。

ウルドが改めて螢一に問い掛けた。

「螢一。本当に良いのね？」

「ああ。」

はつきりと決意の返事を述べた螢一は、そこで少し表情を崩した。

「俺は今まで、君達に充分幸せにしてもらった。これからは、そのツケを払っていかなきゃいけない。でも、これからは、その思い出だけで生きていける。」

「螢一さん！」

ベルダンディーが、螢一の名を呼んだ。

そこで螢一は、佇まいを直すと、高らかに宣言した。

「森里螢一は。君達の知っている森里螢一は、もうこの世には居ない。ここに居るのは森里螢一の抜け殻。俺は…、仮面ライダードラゴンナイトだ！」

その螢一の宣言に呼応するように、母屋の窓ガラスからドラグ

レッダーが現れ、螢一の体に巻き付く様に纏わり付いた。

その時、モンスター出現の金切り音が鳴った。

螢一は、ポケットからカードデッキを取り出し、少しの間それを見つめていたが、やがてカードデッキをポケットに仕舞うと、BMWを停めてあるガレージへ駆け出した。

「螢一さん！」

ベルダンディーに呼ばれ立ち止まった螢一は、ベルダンディーを強く抱きしめ、その耳元で囁いた。

「ベルダンディー。今まで、こんな俺を幸せにしてくれて、ありがとう。こんな俺を愛してくれて、ありがとう…。さようなら！」

そして、ベルダンディーの唇にキスをした螢一は、踵を返して駆け出した。

「螢一さ〜ん！」

ベルダンディーの叫びが辺りにこだました。

モンスター出現場所は猫実公園。

猫実公園に着くと、BMWに乗ったまま、入り口にある電話ボックスに、カードデッキを翳した。

「変身！」

掛け声と共に、Vバックルにカードデッキを装填し、バイク毎ガラスに突っ込んだ。

ディメンションホールの中でドラゴンナイトに変身し、バイクも、ドラゴンサイクルに変化した。

ディメンションホールを抜けると、目の前に、梟の様な姿のモンスター・デッドオウルが居た。

ドラゴンナイトは、ドラゴンサイクル毎ジャンプして、デッドオウルに体当たりをかけると、デッドオウルは大きく後方へ、吹っ飛ばされた。

一旦停止すると、ドラゴンナイトはドラグバイザーに、カードをベントインした。

「ソードベント」

空中から現れたドラグセイバーを掴み左手に持ち替えると、ドラゴンナイトは、ドラゴンサイクルを走らせ、すれ違いざまにデッドオウルを切り付けた。

「うお〜〜！」

ドラゴンサイクルを降りたドラゴンナイトは、ドラグセイバーを右手に持ち替え、デッドオウルに向かって行った。

デッドオウルは、口から光弾を放ったが、ドラゴンナイトは怯まずそのまま向かって行き、二度・三度とドラグセイバーで切り付け、更に渾身の力を込めた廻し蹴りを放った。

ドラゴンナイトの放った廻し蹴りは、デッドオウルの胸元に当たり、デッドオウルは大きく吹っ飛ばされ、地面に叩きつけられた。体勢を立て直したデッドオウルは、ジャンプしてドラゴンナイトに躍りかかったが、ドラゴンナイトは、少し体をかわして、デッドオウルの腹部に切り上げる様な斬撃を放った。

ドラゴンナイトの斬撃を受け、半回転して背中から地面に落ちたデッドオウルは、立ち上がると、背中中の翼を広げて空中に飛び上がった。

「こいつ！下に下りて戦え！」

ドラゴンナイトは喚き立てるが、デッドオウルは、返事の代わりにと言わんばかりに、光弾を連射した。

数発はドラグセイバーで防いだが、何発か喰らって少し怯んだところへ、デッドオウルが体当たりをかけた。

2度程デッドオウルの体当たりを受けて、ドラゴンナイトは地面に倒れた。

「くっそ〜。調子に乗るなよ!」

ドラゴンナイトは体を起こしながら、ドラグバイザーにカードをベントインした。

「アドベント」

再度、ドラゴンナイトに体当たりをかけたようにしたデッドオウルの横から、ドラグレッダーがドラグブレスを放った。

「うぎゃ〜!」

横腹の部分にドラグブレスをまともに受け、デッドオウルは地面を転げ回った。

「これで終わりだあ〜!」      ドラゴンナイトは、ドラグバイザーにカードをベントインした。

「ファイナルベント」

「でや〜〜!」

ドラゴンライダーキックがデッドオウルに命中し、大爆発が起きた。

砕け散ったデッドオウルの体から、光の球体が現れ、ドラグレッダーがそれを吸収して消えた。

他力本願寺に戻ると、母屋は真っ暗だった。

「ただいま。」

一応帰りの挨拶をしたものの、当然返事も無ければ、出迎えてくれる美しい笑顔も無い。

自室に入ると、正面の勉強机の上に、小さなビロードの箱が置いてあった。

中を開けると、指輪が一つ入っていた。

ベルダンディーが螢一の元へやって来て、初めて迎えたクリスマススイブに、ベルダンディーにプレゼントした指輪だった。

それを見た時、螢一の瞳から涙が溢れ出した。

「ベルダンディー……。ごめんね……。」

螢一は、指輪を握り締め、男泣きに泣いた。

## Vol.9 (前書き)

前回の“ああっ女神さまドラゴンの騎士”は

ベルダンディーとの別れという前代未聞の話してしまった前話。

暫く、ノルン三姉妹は出て来ませんが、いずれ必ず再登場させます。

何たってベルダンディーは、「ああっ女神さま」のメインヒロインですから。

では、どうぞ。

ゼイビアックスは北岡と共に、母艦のモニターで、手下のモニター・レッドミニオンと、ドラゴンナイト・ウイングナイトの二人の仮面ライダーの戦いを見ていた。

ファイナルベントが命中し、全てのレッドミニオンが全滅したところで、ゼイビアックスは、モニターを閉じた。

「厄介なコンビが誕生したな。今すぐ私の計画に支障が出るとは思えんが、それでも今のうちに何とかしておかなければならんな。」

ゼイビアックスの危惧に、北岡が不適な笑みを浮かべながら言った。

「將軍。俺に任せて下さい。必ず奴らを引き離してみせますよ。」

「出来るかね？」

「俺に2体頂ければ必ず。」

「良いだろう。やってみたまえ。」

そう言っただけでゼイビアックスは、何も無い空間に向かって右手を翳すと、縞馬型のモニター「アビスゼブラ」が2体現れた。

「へへへっ。流石です。ご期待を。」

再度不適な笑みを浮かべた北岡は、ゼイビアックスに一礼すると、アビスゼブラを従え司令室を出た。

北岡を見送ったゼイビアックスは、北岡が出て行った後、一人呟いた。

「ペテン師め。」

猫実市の中心街から少し離れた住宅街にあるアパートの一室で、螢一は目を覚ました。

螢一は現在、他力本願寺ではなく、この家賃4万円のアパートに住んでいる。ベルダンディー達が天上界に帰った次の日、本来の他力本願寺の主である越庵和尚が帰ってきた。

元々螢一とベルダンディーは、越庵が修行の旅に出ている間の留守番という形で、他力本願寺に住んでいた。

越庵は、留守番の礼ということで、このまま他力本願寺に住んでも構わないと申し出てくれたが、螢一は辞退し、部屋が見つかる迄の間だけ他力本願寺に住み、今の部屋が見つかったら、半ば逃げる様に他力本願寺を出た。

それは、螢一なりの幸せだった過去の自分との決別といったところか。

寝室として使っている和室を出て、台所で朝食を作る。

他力本願寺にいた頃に、ベルダンディーが作ってくれたのと同じく、ご飯と味噌味の朝食だ。

出来上がると、リビングとして使っている洋室に持って行き、炬燵の上に置いて食べはじめた。

時間にして15分程で食べ終わり、仕事着に着替えて、財布と携帯電話・カードデッキが入ったナップサックとヘルメットを持ち、部屋を出た。

ヘルメットを被り、BMWに跨がって、ワールウィンドに向かった。

昼過ぎ。オーナーの千尋が所用で遠方へ出掛けるということで、店が早くに終わり、螢一は早めの帰路についた。

部屋に入ると、リビングにレンがいた。

「お帰り螢一。邪魔してるぞ。」

「レンさん、来てたんですか。」

「ああつ。今日は随分早かつたんだな。」

「ええ。千尋さんが用事があるって出掛けたんで、俺一人で店仕切るの大変だろうつてんで、今日は早く終わったんです。ベルダンデーも居ないしね。」

「そうか。ご苦労さん。」　そう言つてレンは、リビングにある螢一のバイク関連の雑誌を読んでいた。

ちなみにレンは、螢一がベルダンデーと別れた事は知っていた。

螢一は、寝室に入つて普段着に着替え、台所の冷蔵庫の中から麦茶の入ったペットボトルを取り出すと、リビングのレンが座っているソファアの向かいにある座椅子に腰を下ろした。

相変わらず雑誌を読み耽つているレンを見ながら、螢一は一つの疑問をレンにぶつけた。

「レンさん。一つ聞いても良いですか？」

「何だ？」

「一体誰なんですか。ゼイビックスにカードデッキを渡したのは？」

螢一の問いに、レンは雑誌を炬燵に置いて、螢一の方を見た。

「お前の前のドラゴンナイトだ。」

「本当ですか？」

「ああつ。」

「でも、一体どうしてそんなことを…。」

「俺も知りたい。」

レンが、若干苦痛に歪んだ様な顔で呟いた。

「だから初めて会つた時に、俺の事信用しなかつたんですね。」

「お前は、あいつとは違うつて頭では判つてたのにな。」

その時、モンスター出現の警鐘が聞こえてきた。

螢一が、バイクのキーとヘルメットを取りに行こうとしたのを、レンが止めた。

「待て。こっちの方が早い。」

そして二人は、窓ガラスにカードデッキを翳した。Vバツクルが出現し、腰に装着される。

「変身！」

掛け声と共に、Vバツクルにカードデッキを装填し変身した二人は、窓ガラスに飛び込んだ。

ライドシューターを降りた二人の仮面ライダーは、辺りを見回すと、レッドミニオンが4体現れ、二手に別れて逃げ出した。

「螢一。お前は向こうを頼む。俺はこっちだ。」

「わかりました。」

ドラゴンナイトに指示を出し、ウイングナイトは、ドラゴンナイトとは逆方向に逃げたレッドミニオンを追った。

少し開けた広場迄逃げていたレッドミニオンは、ドラゴンナイトの方を向いて戦闘体勢に入った。

「もう逃げないの？んじゃ覚悟して貰おうか！」

不敵に言い放ったドラゴンナイトは、レッドミニオンに向かって走り出した。レッドミニオンも、ドラゴンナイトに向かって行き、先頭の一体が、右ストレートを放った。

ドラゴンナイトはそれを前転宙返りでかわし、再度レッドミニオンに向き直ると、一体の両肩を掴んで腹部に二度膝蹴りを入れ、更に相手の腕を掴むと、そのまま捻り上げた。

その反動で、レッドミニオンは、空中を一回転して、地面に仰向けで倒れ込んだ。

すかさずドラゴンナイトは、そのまま二体目のレッドミニオンに肉迫する。

レッドミニオンは右フックを放つが、ドラゴンナイトは、かい潜る様に右フックをかわし、相手の腹部にミドルキックを放った。

ミドルキックがレッドミニオンの腹部に当たり、もんどりうってうずくまるうとしたレッドミニオンの胸元を二度三度と殴り、更に、右手を掴んで投げ飛ばした。

投げ飛ばされたレッドミニオンは、もう一体のレッドミニオンを巻き込んで、地面に倒れた。

ドラゴンナイトは、カードデッキからカードを取り出し、ドラグバイザーにベントインした。

「ソードベント」

「どうした？かかって来いよ！」

空中から現れたドラグセイバーを掴み、ドラゴンナイトは手招きして挑発した。ドラゴンナイトの挑発に激昂したのか、二体のレッドミニオンは、猛烈な勢いで襲い掛かって来た。

一体目のレッドミニオンが右ストレートを放つと、ドラゴンナイトは、それを左手で受け止め、がら空きになったレッドミニオンの腹部にドラグセイバーを突き刺した。

「うぎゃー！」

悲鳴を上げ、ドラグセイバーを引き抜こうともがくレッドミニオンの胸元に、ミドルキックを放った。

吹っ飛ばされたレッドミニオンは、壁に叩き付けられ、煙の様に消えた。

地面に落ちたドラグセイバーを拾い上げ、残ったもう一体のレ

ツドミニオンに肉迫する。

レッドミニオンは側転してかわすが、ドラゴンナイトは、着地する瞬間にレッドミニオンを二度切り付け、足払いをして仰向けに倒れたレッドミニオンの腹部に、ドラグセイバーを突き立てると、また煙の様に消えた。

「どんなもんだあ〜！」

勝どきの声を上げていたドラゴンナイトだが、不意に背中に切り付けられた様な衝撃が走った。

振り返ると、プレハブの建物の屋根の上に、ブーメランの様な武器を持った縞馬型モンスター・アビスゼブラが、勝ち誇った様に見えるが、いなないていた。

「こいつ！お前も覚悟しろ！」

ドラゴンナイトは叫びながら、アビスゼブラに向かって行った。アビスゼブラが高い所に居たので、ドラゴンナイトもジャンプして屋根に乗ろうとしたが、アビスゼブラに殴りつけられ、地面に落下した。

「くっそ〜。やったな！」　ドラゴンナイトは悪態をつくが、アビスゼブラが、地上に降りてきたと同時に、ドラゴンナイトに蹴りを放った。

立ち上がるうとした所に蹴りを入れられ、仰向けに地面に倒れたドラゴンナイトだが、何とか立ち上がり、アビスゼブラの腹部にダイビングヘッドの要領で、頭突きを撃ち込んだ。

アビスゼブラを怯ませたものの、頭を抱えてうずくまるドラゴンナイト。

「痛ったあ〜。やっぱり頭突きは攻撃に向かないや…。」

自分の行いを後悔していたドラゴンナイトに、アビスゼブラが両腕の肘部についている突起物を振るって攻撃してきたが、ドラゴンナイトは辛うじてかわし、アビスゼブラにドロップキックを放つ

た。

吹っ飛ばされたアビスゼブラは、近くのビデに立て掛けてある単管に突っ込み、単管毎倒れた。

それを見たドラゴンナイトは、ドラグバイザーにカードをベントインした。

「ストライクベント」

ドラグクローを装備したドラゴンナイトは、自分の上にある単管を退かせようとアビスゼブラに、ドラグクローファイヤーを放った。

一発で倒せなかったものの、それでもかなりのダメージを受けたのか、アビスゼブラは、よろめきながらも向かって来た。

「これで終わりだあゝ！」　ドラゴンナイトは、更にカードをベントインした。

「ファイナルベント」

空中でドラゴンライダーキックの体勢になる。

「はあゝ！」

ドラゴンライダーキックが命中し、大爆発が起こった。

一方ウイングナイトも、別の方向に逃げたレッドミニオンを追いかけていた。　周囲にコンテナや、その他障害物が無造作に置いてあるスペースで、レッドミニオンは、ウイングナイトに向き直り、襲い掛かって来た。

ウイングナイトは、一体目のレッドミニオンが放ってきた廻し蹴りかわし、二体目のレッドミニオンが放った廻し蹴りを受け止めると、足払いをかけ、仰向けに倒れたレッドミニオンを踏み付け

た。

すかさず一体目のレッドミニオンに向き直り、右・左とパンチを放ってきたレッドミニオンの攻撃を受け止め、から空きになった腹部に蹴りを入れ、もんどりうって後退しようとしたレッドミニオンに更に廻し蹴りを放った。

吹っ飛ばされ、近くのコンテナに叩き付けられたレッドミニオンを横目に、もう一体のレッドミニオンに向き直ると、十字型の大きな武器を構えて待っていた。

ウイングナイトも、ボキボキと指を鳴らしながら、ファイティングポーズをとった。

それを見たレッドミニオンは、武器を水平に持ち替え、突きの様に繰り出してきたが、ウイングナイトは、ダークバイザーで受け止め、逆に連続で斬撃を放ったが、レッドミニオンも素早く防御し、一旦ウイングナイトとの間合いを離れた。

一定の間合いを保ったまま暫く睨み合っていたが、やがて痺れを切らしたレッドミニオンが、武器を振るって飛び掛かって来たが、ウイングナイトは、切り上げる様な斬撃を放ち、レッドミニオンは、空中で半回転して背中から地面に落ちた。

直後に、もう一体のレッドミニオンが殴り掛かってきたが、その攻撃を受け流したウイングナイトは、レッドミニオンの背中に蹴りを入れた。

更に、武器を持った方のレッドミニオンが、横薙ぎ・廻し蹴りと連続攻撃を繰り出してきたが、難無くかわしたウイングナイトは、再度連続で切りかかる。

ウイングナイトの連続切りを受け止め、少し飛び退いたレッドミニオンは、手に持った武器を投げつけた。

ウイングナイトは、それをかわし、その武器は、後ろからウイ

ングナイトに襲い掛かろうとしたレッドミニオンに命中した。

立ち上がったそのレッドミニオンは、踵を返して逃げ出した。

ウイングナイトは、少し体勢を低くして、レッドミニオンの腹部に肘打ちを当てた。

それと同時に、疼くまったレッドミニオンの背中を踏み台にして空中で一回転し、着地と同時に足払いの様に横薙ぎの斬撃を放ったが、レッドミニオンはジャンプしてかわし、そのまま近くのコンテナに飛び乗った。

それを見たウイングナイトは、空中で一回転して、コンテナの上にあったレッドミニオンに、ドロップキックを浴びせた。

吹っ飛ばされたレッドミニオンは、地面に叩き付けられ、煙の様に消えた。

一体レッドミニオンを倒したウイングナイトは、そのまま逃げたレッドミニオンを追いかけた。

アビスゼブラを倒し、一息ついていたドラゴンナイト。

「ふう〜。何とかやつつけたな。早くレンさんと合流しないと。」

そう呟いたドラゴンナイトを、次の瞬間、激しい爆音と衝撃が襲った。

「何だ何だ！一体何が起こった!？」

見ると、30メートル程離れた所にある重機の傍らに、巨大なバズーカを構えた、ドラゴンナイト・ウイングナイトと同じ様な緑色のアーマーを纏った人物が居た。

「仮面ライダー！」

思わず口走ったドラゴンナイトに、相手のライダーは、二発・三発とバズーカを撃ってきた。

「うわあ〜！」

一発まともに喰らい、吹っ飛ばされたドラゴンナイトだが、何とか受け身をとって体勢を立て直した。

ライダーは、バズーカを投げ捨て、右の腰に下げていた銃を取り出し、ドラゴンナイト目掛けて連射した。

「おい！ちよつと待てって！」

喚きながら逃げるドラゴンナイトに、ライダーは尚も銃を連射してくる。

物陰に隠れたドラゴンナイトを一瞬見失ったライダーは、辺りを見回した。

「うわあ〜！」

近くの建物の上から、ドラゴンナイトがドラグセイバーを振り下ろしながら落下してきた。

ライダーは、その攻撃をかわしたが、ドラゴンナイトは二度・三度と斬撃を放った。

ドラゴンナイトの繰り出した斬撃の最後の一撃を、銃で受け止めたライダーは、そのままドラゴンナイトのアーマーの胸元を掴み、近くにあった鉄骨に叩き付けた。

更に、ドラグセイバーを持ったドラゴンナイトの右手を押さえ付け、その右手を銃で数回殴った。

「うわあ〜！」

悲鳴を上げたドラゴンナイトは、ドラグセイバーを地面に落としました。

ライダーは、尚も銃で殴り続ける。

「くっそ〜！」

ドラゴンナイトは、ライダーの首を掴み、押し出した。

「俺は森里螢一！あんた誰!？」

ライダーも、ドラゴンナイトの首を掴み、胸元に二度膝蹴りを入れ、ドラゴンナイトを引き寄せて静かに言い放った。

「お前をベントしてやる。」

ライダーの放つ静かな迫力に気圧されながらも、ドラゴンナイトも言い返した。

「やっぱりウイングナイトの言った通りだな。何故こんな事するんだ？ゼイビアクスの狙いは地球なんだぞ！ウイングナイトと一緒にゼイビアクスを倒そう！」

「何だと。ウイングナイトと一緒にゼイビアクスを倒す？」

そう言つと、ライダーはドラゴンナイトを離し、変身を解除した。

そこには螢一より数歳位年上の、知的な雰囲気を漂わせた男が居た。

「俺は北岡秀一。仮面ライダーゾルダだ。」

変身を解除した螢一は、北岡に事の顛末を説明した。

「その話しは本当か？レンが言ったのか？」

「はい。地球をベントラの様にさせないって。」

螢一の説明に、北岡は、怪訝な表情で言った。

「森里。お前は騙されてる。」

「どういう事ですか？」

「奴は、ゼイビアクスの手下だ。カードデッキを奪って地球の連中にばらまいてるんだ。」

聞いていた話と全く違う内容に、螢一は驚いた。

「それは違います！それをやったのは、俺の前のドラゴンナイトですよ！」

「彼はウイングナイトに歯向かった。それで最初にベントされたんだ。」

「そんなの嘘だ！」

「俺はこの目で見たんだ！ウイングナイトは俺達を騙してゼイビアクスのアジトに連れて来た。そして襲い掛かって来たんだ。」

俯く螢一に、北岡は、その時の出来事を話し出した。

「俺は止められなかった。ドラゴンナイトが、かつての親友に裏切

られ、ベントされる様を。俺は寸前の所で逃げ出した。」

北岡の話しが全く受け入れられない螢一は、北岡に反論した。

「だったら、どうしてレンさんは、俺を助けてそのままにしてるんですか？今までベントするチャンスはいくらでもあったんですよ？」

「わからないのか？騙し討ちが奴の手口なんだよ。」 今までの

レンの不器用ながらも誠実な人柄を、そして、一緒に戦うと宣言した時の本当に嬉しそうなレンの笑顔を思い出しながら、螢一は更に拒否の言葉を述べた。

「そんなの信じられません。」

「そう思うか？」

「はい。」

少し考え込んでいた北岡は、

「分かった。だったらその証拠を見せてやる。」

そう言つと、先に歩き出した。

暫く歩くと、少し開けた広場で、アビスゼブラと交戦しているウイングナイトを見つけた。

螢一と北岡は、物陰に隠れて様子を見ていたが、アビスゼブラがウイングナイトに押され出した所で、北岡が動いた。

「いいか森里。俺が奴の化けの皮を剥がしてやる。お前の目で真実を見極める。」

螢一に言つと、ポケットからカードデッキを取り出し構えた。

Vバツクルが出現し、腰に装着される。

「変身！」

掛け声と共にVバツクルにカードデッキを装填し、仮面ライダ―ゾルダに変身する。

「ここで見てろ。奴に見つかるなよ。」

再度螢一に声をかけたゾルダは、右の腰に下げていた拳銃型召喚機「マグナバイザー」を取り出すと、ウイングナイトの方に向かって行った。

一方、アビスゼブラと交戦していたウイングナイトは、自分に向けて放たれた銃弾に、手を止めて、銃弾が放たれた方を見ると、マグナバイザーを構えたゾルダが立っていた。

その隙に、アビスゼブラが逃げ出した。

ウイングナイトは、逃げたアビスゼブラを一瞥すると、ゾルダに向き直った。

「諦めるウイングナイト！俺達は止められない！」　そう言うと同時にゾルダは、マグナバイザーを連射した。

「それはどうかな。」

ウイングナイトは、飛んできた銃弾をダークバイザーで防ぐと、ゾルダに接近し、ダークバイザーで切り付けた。

ゾルダは、ウイングナイトの放った斬撃をマグナバイザーで防ぎ、ミドルキックを放つ。

ウイングナイトは、ミドルキックを受け止め、再びダークバイザーで切り付けた。

ゾルダは再度マグナバイザーで受け止め、競り合いながらウイングナイトに言った。

「お前とゼイビアックスの好きにはさせないぞ！」

「何だと！」

ゾルダの言葉に一瞬たじろいだものの、構わずウイングナイトは、ゾルダの横腹に膝蹴りを入れ、よろけたゾルダの胸元を切り付けた。

ウイングナイトの連続攻撃受け、仰向けに倒れたゾルダの喉元に、ウイングナイトは、ダークバイザーを突き付けた。

「この一件から手を引け！ウイングナイト！」

「断る！」

「この地球を、お前とゼイビアックスに支配等させないぞ！」  
「何を言ってるんだ。」

ゾルダの言っていることが全く理解出来ず、ウイングナイトが困惑していると、近くにあるプレハブ小屋の窓ガラスに、モンスター形態のゼイビアックスが浮かび上がった。

「やれ、ウイングナイト！ゾルダをベントするんだ！」

「一体何なんだ。」

更に困惑しているウイングナイトの隙をついて、ゾルダが逃げ出した。

「おい待て！」

慌ててゾルダを追いかけたウイングナイトだが、暫く行った所で見失った。

「逃げられたか。」

変身を解除したレンの元に、螢一がやってきて怒鳴りたてた。

「ゼイビアックスの手下だったのか！あんた！」

「何馬鹿な事言っているんだ。」

螢一の豹変振りに、レンが驚きの声を上げた。

「見たんだ。ゼイビアックスとグルになってた！」

「連中に騙されるな。螢一。」

説得しようとするレンだが、聞く耳持たずの螢一は、更にまくし立てた。

「ゼイビアックスと他の仮面ライダーを始末するつもりなのか！？」

「本気でそう思ってるのか？」

「俺がゾルダに協力したら、どうする？俺迄ベントするか？」

そう吐き捨てた螢一は、レンをその場に残し、近くにあった軽トラックの窓ガラスに消えた。

「ゾルダの奴。」

一人残されたレンは、苦々しく呟いた。

レンと別れ、バイクで街中を走っていた螢一は、再びモンスター出現の警鐘を聞いた。

「出たな。」

猫実駅近くの駐輪場にバイクを止め、周辺を探し回っていた螢一は、路地裏に入っ行き、電柱についているカーブミラーに写っているアビスゼブラを見つけた。

ドラゴンナイトに変身し、カーブミラーに飛び込み、ライドシユーターに乗ってデイメンシヨンホールを進んで行った。

デイメンシヨンホールを抜け、ライドシユーターを降りると、目の前にアビスゼブラが居たので、先制の飛び蹴りを仕掛けようとしたが、側面から、別のアビスゼブラが現れ、ドラゴンナイトの体を掴んで、そのまま近くのビルの屋上に連れていった。

ドラゴンナイトを連れ出した仲間のアビスゼブラを見送っていると、別のライドシユーターが現れ、中からゾルダが姿を見せた。

ゾルダはライドシユーターに乗ったまま、腰に下げていたマグナバイザーを取り出すと、アビスゼブラに向けて撃った。

アビスゼブラは、接近戦に持ち込もうとしたが、ゾルダはマグナバイザーを連射して接近を止めた。

アビスゼブラは、尚も続くゾルダの遠距離攻撃に業を煮やし、自分の体を縞模様の部分で分解させると、ゾルダの背後で再構成させ、両肘の突起物で、ゾルダの背中を攻撃した。

ほとんど不意打ちに近い攻撃を受けたゾルダは、大きく前につきんのめつたが、何とかその場に踏み止まった。

「縞馬野郎！調子に乗るなよ。」

そう言うとゾルダは、マグナバイザーの上部のスライド部を引き、トリガーの前にあるマガジンスロットを出し、そこにカードをベントインした。

「シュートベント」

電子音の後、空中から、ゾルダの身長をも上回る巨大なバズーカ「ギガランチャー」が出現し、ゾルダは、それを手にした。

一方、ビルの屋上では、ドラゴンナイトは、別のアビスゼブラと戦っていた。だが連戦で少し疲れが出てきたのか、最初程の動きのキレは無かった。

「くっそ〜。やっぱり連戦は少しキツイかな。」

愚痴りながらも、ドラグバイザーにカードをベントインした。

「ソードベント」

空中から現れたドラグセイバーを掴み、アビスゼブラに切り掛かったが、アビスゼブラは、ドラゴンナイトの斬撃を全てかわし、最後の横薙ぎの攻撃をジャンプでかわすと、ドラゴンナイトの肩を踏み台にして、そのままビルの下へと逃げて行った。

「ああっ。待て！」

ドラゴンナイトは追跡しようとしたが、完全に逃げられてしまった。

肩を落としてビルの下を見ると、地上ではゾルダが、もう一体のアビスゼブラに向けて、ギガランチャーを撃とうとしていた。

「悪いが、俺は狙った獲物は逃さないぜ！」

不敵に言い放ったゾルダは、アビスゼブラに、ギガランチャーを撃った。

アビスゼブラの体の中心にギガランチャーの弾丸が命中し、大爆発が起きた。倒したアビスゼブラの体から、光の球体が出現した。

すると、ゾルダの傍らの地面から、体長3メートル程の、ギリシャ神話の怪物ミノタウロスと二足歩行のロボットを融合させた様なバッファロー型モンスター「マグナギガ」が、競り上がる様に出現し、口を開けて、掃除機で吸い込む様に光の球体を吸収した。

マグナギガが、光の球体を吸収したのを見届けると、

「だが、狙いはお前じゃないけどな。」

と言いつつ、その場を去った。

変身を解除した螢一は、北岡と合流した。

「北岡さん。」

「よおつ森里。無事だった様だな。」

「はい。」

「ところで、レンの正体はわかったか？」

北岡の質問に、螢一は俯いて黙り込んだ。

それを見た北岡は、気遣わしげに螢一の肩に手を置いた。

「まあ良いさ。今日はもう疲れたろう？帰ってゆっくり休め。この後、別のモンスターが出て来ても、俺が片付けといてやるから、お前は来なくて良い。」

「ありがとうございます。北岡さん。」

「また今度会って、今後の事を話し合おう。」

「はい。それじゃ。」

「おおつ。気をつけてな。」

そう言いつつ二人は別れた。

OREジャーナルのオフィスで、麻弥と城戸真二は、電話の前に座って一つの電話番号をダイヤルしていた。

少し前に、メルマガの購読者の一人から、行方不明者に関する新しい情報が入ったので、電話してほしいというメールが、麻弥の

パソコンに届いたのだった。

麻弥は、久々に入る新しい情報に期待を寄せながら呼び出し音を聞いていた。程なくして、相手が電話口に出た。

「もしもし。浅倉ですが。」

「浅倉威たけしさんですね？私、OREジャーナルの桃井麻弥です。」

「ああ。貴女が桃井さんですね？初めましてと言えば宜しいんですかね？浅倉威です。いつもメルマガを楽しく拝見させて頂いております。」

浅倉威と名乗った電話の相手は、至極丁寧な挨拶をしてきた。

「こちらこそ、いつもご愛顧ありがとうございます。それで早速ですが、新しい情報というのは？」

早々に、麻弥が話しを切り出した。

「はい。貴女のメルマガで、最近頻繁に起こってる行方不明事件について、私も興味本位で色々調べてたんですが、最近新しく手に入れた情報の中に、猫実市立病院に、この間新しい病棟が出来たんです。主に精神疾患の患者の為の病棟らしいんですが、その中に、モニターに誘拐されたと思われる行方不明者が、何人か收容されているらしいという情報入手したんですよ。」

「それ本当ですか？」

浅倉の話しに、麻弥が思わず大声を上げた。

「はい。色々な街を徘徊していたところを收容されたそうなんです。彼等は普通に食事・睡眠・排泄行為といった基本行為の他に、テレビとかも見るみたいなんです。心が空っぽといった状態らしいんですよ。」

「まるで、UFOにさらわれた人みたいに？」

麻弥が、例えを用いて言った。

「でなければ…、鏡か。」 浅倉の推論に、麻弥のテンションは更に上がった。

「わかりました。これから取材してみます。」

「そうして下さい。出来れば、色々と資料もお見せしたいので、近々お会いしたいのですが、宜しいですか？」

「わかりました。出来るだけ早くお時間を作ります。どうも貴重な情報をありがとうございます。」

「いいえ、こちらこそ。では、後ほど。」

そう言つて、電話は切れた。

受話器を置いた麻弥は、大久保に向き直つて言った。

「編集長。これから猫実市立病院に行つてきます。」「久々に特ダネの予感がすんなあ。おい真二。お前も行つてこい！」

「俺も！良いんすかあ！？」

真二が、目を輝かせながら言った。

「おおつ。後学の為だ。しっかり勉強してこい！」

「はいっ！了解っす！」

「それでは編集長。行つてきます。」

「おおつ。気いつけてな。」

新たな情報を手に入れた麻弥は、真二を連れて意気揚々と出掛けて行つた。

猫実市立病院に着いた麻弥と真二は、車を駐車場に停めて中に入った。

来る途中、電話で取材のポイントをとつたが、あえなく断られてしまった。だが、折角得たネタを逃すまいと、とりあえず新しく出来た病棟に向かつた。病棟の入り口に着くと、そこには警備員か一人立ち番をしていた。

「何か簡単に入れそうにないっすねえ。麻弥さん、どうします？」

真二が小声で耳打ちした。

暫く俯いて考え込んでいた麻弥は、顔を上げると、真二の手を取つてその場を後にした。

「どうしたんすか？麻弥さん。」

麻弥の突然の行動に、面食らった真二が言った。

「考えがあるの。とにかくこっちへ。」

尚も真二の手を引きながら、麻弥は、自分が考えた“プラン”を話した。

数十分後、白衣に着替えて医療器具を乗せたワゴンを押しながら、新設病棟に近づく麻弥と真二の姿があった。

入り口に着くと、立ち番をしていた警備員が声をかけてきた。

「随分早い交替ですね。何かあったんですか？」

警備員の質問に、一瞬たじろいだ麻弥だが、努めて平静を装いながら答えた。

「彼新人なんで、色々教えておく事があるんですよ。」

「そうですか。それじゃどうぞ。」

麻弥の言葉を信用した警備員は、ドアを開けて二人を中に入れた。

中に入り、暫く進んだ所で、真二が口を開いた。

「今の警備員じゃなくて警官でしたね。何でたかが病院の新設病棟の警備に警官が駆り出されてるんすかねえ？」

「それだけここの秘密が重大って事よ。」

そう言つと、麻弥は、手前の病室に入った。

中には、浅倉からの情報通り、虚ろな目をした患者達がベットに横たわったり、椅子に座ったりしていた。

患者の顔の前で、手を振ってみたが、何の反応も示さなかった。

麻弥は、ポケットから行方不明者の顔写真入りのリストを取り出し、一人一人の顔と名前を確認していった。

「確かに全員じゃないけど、何人かいますね。でも、一体どうしちやっただんですかね。この人達。」

「さあ。」

暫く二人は、各病室を廻っていたが、ある一つの個室のベッドに横たわっている一人の男を見つけた麻弥は、思わず声を上げた。

「大変！」

「どうしたんですか？麻弥さん。」

麻弥の声を聞き、隣の病室に居た真二が、麻弥の居る個室に入つて声をかけた。

「この人がどうかしたんですか？」

麻弥は、絞り出すような声で呟いた。

「森里桂馬さん。森里螢一君のお父さんよ。」

「この人が。」

真二も、その男をマジマジと見た。

「こうしちゃいられないわ！森里君に知らせなきゃ。真二君行くわ

よ！」

「はいっ！」

そうして二人は、病院を後にした。

## Vol.10 (前書き)

前回の、ああっ女神さまドラゴンの騎士は

作中に出てくるミラーモンスターですが、仮面ライダー達の契約モンスターや、今回の話しに出てくる『オメガゼール』以外のモンスターの名前は適当に付けたんで、悪しからず了承下さい。

では、ごうござー！

次の日、ワールウィンドでの仕事が終わった螢一は、猫実公園で北岡と会っていた。

「北岡さん。」

「よお森里。お疲れさん。」

そう言って北岡は、持っていた缶コーヒーの一つを螢一に投げてよこした。

「ありがとうございます。」

「いいさ。ところで、レンの事は。」

レンの話題になった途端、螢一の表情が曇った。

「まだ信じられません。あの人がゼイビアックスの手下だったなんて！」

「そうだろうな。信じてた奴に裏切られたんだからな。俺も同じ気持ちだったさ。」

北岡も同様に、表情を曇らせた。

暫くその場に漂っていた重い空気を打ち破ったのは、螢一の携帯電話の着信音だった。

相手は麻弥からだった。

「はい。森里です。」

「森里君？桃井だけど、見つかったのよ！貴方のお父さんが！」

「何ですって！」

麻弥がもたらした大きな情報に、思わず螢一は、大きな声を上げた。

「本当ですか。麻弥さん！それで父は何処にいるんですか！？」

「落ち着いて森里君。今私は猫実市立病院に居るの。詳しくはここで話すわ。今から来れる？」

「わかりました。猫実市立病院ですね？直ぐに行きます！」

「ええっ。気をつけて来てね。」

「はい。」

螢一は電話を切ると、自分のバイクを停めている場所へ走って行った。

北岡が、慌てて後を追った。

「おい森里！一体どうしたんだ？」

「桂馬さんが。父さんが見つかったんですよ！」

「そうか。良かったじゃないか。一応お前の連れって事で、俺も見舞いに行かせてもらおうかな。」

「はい！勿論です！」

螢一は、顔を輝かせながら、バイクを走らせた。

レンは、ベンチに腰掛けながら、昨日の螢一とのやり取りを思い出していた。螢一は、明らかにゼビアックスとゾルダの奸計にはまってしまっている。

天上界から、女神を呼び寄せる程の素直さと純粹さを持つ螢一の性格が、この時ばかりは仇になってしまったのだ。

「連中に乗せられ過ぎだ。螢一。」

そう呟いた時、モンスター出現の警鐘が聞こえてきた。

レンは、ポケットからカードデッキを取り出すと、近くにある自動販売機にかざした。

Vバツクルが出現し、腰に装着される。

「変身！」

掛け声と共にVバックルにカードデッキを装填し、ウイングナイトに変身すると、ガラスに飛び込んだ。

猫実市立病院に着くと、正面玄関口に麻弥が待っていた。

「森里君来たのね。そちらの方は？」

「北岡秀一さん。ベントラの生き残りの仮面ライダーです。」

「レンの他にも生き残りが居たの？でもあの時、レンは自分以外はベントされたって。」

「彼は…、ゼビアックスの手下だったんです！俺達を騙してたんだ！」

「そんな…。」

螢一の話しに、麻弥は絶句した。

「その話しは後でします。それより父は…。」

「そうね。こっちよ。」

麻弥が先立って、螢一を案内する。

「待って下さい麻弥さん。正面玄関は、こっちですよ。」

「正面から入るとまずいの。だから、こっちへ。」

そう言って麻弥は、螢一と北岡を裏口へ案内した。その間

麻弥は、頭の中で、記憶の糸を手繰り寄せていた。

（この北岡って男。何処かで見たことがあるわ。何処でだったかしら。）

桂馬の居る病室に着くと、螢一は一気に表情を崩した。

「桂馬さん！良かった。無事で！」

「森里君。声が大きいわよ。」

大きな声を出した螢一を、麻弥が慌てていさめた。

「どうしてですか！？麻弥さん！」

「何故だかわからないけど、ここは本来関係者以外は立入禁止なのよ。」

「そんな！」

螢一は驚きの声を上げながらも、桂馬に呼びかけた。

「桂馬さん！俺だよ。螢一だよ！わからないの？」

螢一は必死に呼びかけたが、桂馬は前を向いたまま、何の反応も示さなかった。

その様子を、後ろで見ていた北岡は、正面から桂馬の顔を覗き込んだ。

「無駄だ森里。お父さんは、抜け殻にされてしまっている。」

北岡が、静かに言い放った。

「どういふ事ですか？」

「症状を見ればわかる。ゼイビアックスは、お父さんを拉致したときに、ライフエナジーを抜き取ったんだ。ライフエナジーを抜き取られると、こうなるんだよ。」

「どうしたら桂馬さんを元に戻せるんですか？教えて下さい！俺その為なら何でもやります！」

螢一は北岡に、縋り付く様に言った。

「ゼイビアックスだ。奴を倒すしかない。」

「やっぱり、最後はそこですか？」

「ああ。それと、ウイングナイトもな。」

北岡の出した結論に、螢一は、うなだれた。

すると、背後から男の声がした。

「誰だお前達は？ここは関係者以外立入禁止だ。二人共でるんだ。」  
見ると、白衣を着た医師らしき男が、入り口に立っていた。

「えっ。二人つて…。」

螢一と麻弥は、訝しげに顔を見合わせ、振り向くと、そこに居た筈の北岡が居なくなっていた。

「さあ。二人共出るんだ。」

尚も退出を促す医師に、螢一は縋り付いた。

「僕は森里螢一と言います。この患者、森里桂馬は、僕の父です。お願いです！話しを聞かせて下さい。」

螢一は、土下座して懇願した。

「ちよつと森里君。やめなさい！いくらなんでも、みっともないわよ。」

麻弥が慌てて、螢一を立たせようとする。

医師は、いきなり土下座してくる螢一を見て、流石に不憫に思ったのか、少したじろぎながら言った。

「わ、わかった。ここで少し待っていてくれ。」

そう言つと、医師は病室を出て行った。

宇宙船に戻った北岡を、ゼイビアックスが出迎えた。

「ただいま戻りました。將軍。」

「お帰り北岡君。どうやら螢一君を上手く引き込めた様だね。」

「へへっ。あんなガキちよろいっすよ。」

北岡が得意げに言った。

ゼイビックスは北岡を一瞥すると、踵を返して部屋を出て行くとした。

ドアの前に立ち止まると、少しトーンの低い声で北岡に告げた。

「自惚れも程々にしておくことだな。」

そう言つと、ゼイビックスは部屋を出て行った。

少しの間と言われたにも関わらず、螢一と麻弥は2時間近く待たされた。

その間螢一は、病棟のスタッフに、桂馬の症状の事を聞いて廻つたが、知らぬ存ぜぬの一点張りだった。

病室に戻つた螢一は、椅子に座ると、頭を掻きむしりながら吐き捨てた。

「くそっ！どうして誰も桂馬さんの症状の事を教えてくれないんだ！」

「でも、とりあえず良かったじゃない。お父さんが見つかつて。」

そう言つて麻弥が、螢一を慰めていると、病室のドアが開いて、さっきの医師と警官が入ってきた。

「先生！どうして誰も父の症状の事を教えてくれないんですか!？」

螢一が医師に詰め寄つた。

「落ち着いて下さい森里さん。とりあえずお座り下さい。」

医師は、さっきとは打って変わって丁寧な口調で、螢一に着席を促した。

螢一は渋々椅子に座った。

「申し遅れましたが、私は森里桂馬さんの主治医をつとめておりま  
す、友永と申します。まず森里さんの現在の症状ですが、表立った  
異常は見受けられません。各臓器・血液等正常です。ただ、どうし  
て意識が無いのか、これについては、原因が全くわかっていません  
」

「それで父は、元に戻るんですか？」

螢一が、不安げな表情で聞いた。

「何故意識が無いのかという原因がわからない以上、治療法も元に  
戻るといふ見込みも無いというのが、現在の見解です。」  
友永の説明に、螢一は、がっくりとうなだれた。

「そもそも森里さんは、何故ここにいらっしゃるんですか？ここに収容され  
るまで、森里さんは、何処に居たんですか？」

今度は麻弥が、疑問を述べた？

すると友永の後ろにいた警官が、口を開いた。

「森里さんは、他の行方不明者と一緒に猫実市やその他の町を徘徊  
していたところを保護されました。勿論ここにいるのは、全員では  
ありません。話しは変わりますが、森里さんの入室許可を取ってき  
ました。これからは、このバッジを付けて、ここに入って下さい。」  
そう言って警官は、螢一にバッジを渡した。

「ただし、ここに入れるのは森里螢一さんだけ。そして、この事は、  
決して外部に漏らさないという条件を承諾していただきます。」

警官の出した条件に、螢一は驚きの声を上げた。

「そんな！せめて母と妹だけでも知らせたいんです。」

「それはなりません。そもそもこの病棟は、極秘に創られました。森里さん一人の面会許可を取るだけでも骨を折ったものですから。よろしいですか？」

警官が、螢一に念を押した。

「わかりました……。」

螢一が、力無く呟いた。

「警察や病院は、このことを公表しないんですか？」

今度は、

麻弥が言った。

「はい。今のまま公表すれば、余計なパニックを引き起こしかねませんから。しかし、時期がくれば、必ず公表するというのが、上の見解です。」

麻弥の質問に、警官が答えた。

続いて友永が、螢一に言った。

「森里さん。確かに今は何もわかっていませんが、お父さんや他の患者さん方の症状の原因究明と治療法の模索に全力を挙げています。ですから、どうか希望を捨てないで、我々を信じて下さい。」

「はい。わかりました。」 友永に励まされ、螢一は、一応の納得と了解を経て、友永に自分の携帯番号を教え、病室を出た。

足早に病院の玄関を出て行くこととする螢一を、麻弥が引き止めた。

「ちょっと森里君。貴方これからどうするの？」

「北岡さんを探します。」「待って。どうしてお父さんを助けるの

にゼイビアックスとウイングナイトを倒すって話しになるのよ？」

麻弥が、北岡に会ってから、ずっと抱いていた疑問を言った。

「北岡さんが、それしかないって言ってたじゃないですか！」

「信じるの？その話し。」「見たんだ！この目で！」　螢一が、若干激昂気味に叫んだ。

その時、モンスター出現の警鐘が聞こえてきた。

「もう行かなきゃ。後で連絡します。」

そう言っただけは、その場を去った。

ライドシューターを降りたドラゴンナイトは、辺りを見回した。  
「何処に居る。」

ドラゴンナイトが呟いた時、不意に横からの打撃を喰らい、吹っ飛ばされた。「うわあ〜！」

起き上がったドラゴンナイトが、顔を上げると、巨大な二またの槍を持ち、頭部に槍と同じ形の、特徴的な角を持つレイヨウ型モンスター『オメガゼール』が居た。

オメガゼールは槍を構え直すと、ドラゴンナイトに向かって突進してきた。

「行くぞ！」

気合いを入れたドラゴンナイトは、オメガゼールを迎え撃つたが、オメガゼールは槍を突き出し、ドラゴンナイトを二またの槍で挟み込むと、思いつき後方へ投げ飛ばした。

「うわあ〜！」

更にオメガゼールはジャンプし、空中で、ドラゴンナイトに追

撃の槍撃を放つ。

「ぐふつ。」

近くの木に叩きつけられたドラゴンナイトは、起き上がると、ドラグバイザーにカードをベントインした。

『ソードベント』

空中から現れたドラグセイバーを掴むと、オメガゼールに向かって行った。

「うお〜！」

渾身の力を込めて、オメガゼールに切りかかるが、長さと重さを持つオメガゼールの槍の前に、効果的な攻撃を与えられずにいた。

何度か切り結んでいるうちに、ドラゴンナイトが力負けし、ドラグセイバーが上に弾き飛ばされた。

「ああつ！ちよつと！」

ドラゴンナイトが叫ぶも、オメガゼールが槍を突き出してくる。ドラゴンナイトは、突き出された槍を踏み台にしてジャンプし、空中でドラグセイバーを掴んだ。

「でや〜〜！」

ドラグセイバーを両手で持ち、渾身の力を込めて振り下ろした。オメガゼールが槍を突き上げてくるが、ドラゴンナイトは、突き出された槍毎オメガゼールを叩き切った。

着地したドラゴンナイトは、刃を返して更に数回オメガゼールを切りつけ、胸元にミドルキックを放った。

吹っ飛ばされ、地面に倒れたオメガゼールを見て、ドラゴンナイトは、ドラグバイザーにカードをベントインした。

『ストライクベント』

空中から現れたドラグクローを、右手に装備した。

「よしっ！」

ドラゴンナイトは、オメガゼールに向き直ると、ドラグクローファイヤーを放った。

ドラグクローファイヤーが命中し、大爆発が起こり、そこから出現した光の球体を、ドラグレッツダーが吸収した。

「へえーえ。これがあると、キャンプとか行ったら便利だね。」

軽口を叩くドラゴンナイトだが、不意に他の仮面ライダーが戦っている気配を感じ、辺りを見回していると、近くの雑居ビルの屋上で、ウイングナイトが別のオメガゼールと戦っていた。

「あの人だ。」

ドラゴンナイトが呟いた時、別のオメガゼールが襲い掛かってきた。

一方、ビルの屋上では、ウイングナイトが別のオメガゼールと交戦していた。

ダークバイザーを振るいオメガゼールに切り掛かるが、やはり

こちらもおメガゼールの槍の前に、苦戦を強いられていた。

そのうち、ウイングナイトとおメガゼールの攻撃が相打ちとなり、おメガゼールは後ろのフェンスに叩きつけられただけで済んだが、ウイングナイトはフェンスを越え、ビルの下へ落ちていった。

「うおお〜！」

地面に倒れ伏したウイングナイトに、おメガゼールが更に襲い掛かってきた。ウイングナイトは、おメガゼールの槍撃を地面を転がりながら、かわして立ち上がると、おメガゼールの槍の突きを受け流し、懐に飛び込んでダークバイザーで切りつけた。

更に足払いをかけ、おメガゼールを倒すと、ウイングナイトは、ダークバイザーにカードをベントインした。

『アドベント』

ドラゴンナイトも、後ろから組み付かれていたおメガゼールの下腹に肘打ちを入れ、更にミドルキックでおメガゼールを吹っ飛ばすと、ドラグバイザーにカードをベントインした。

『アドベント』

ドラゴンナイトとウイングナイトに襲い掛かるうとしていたおメガゼールに、ドラグレッダーとダークウイングが、それぞれ体当たりをかけた。

それを見た二人の仮面ライダーは、カードをベントインした。

『ファイナルベント』

「うお〜〜！」

「はあ〜〜！」

ドラゴンライダーキックとダイビングスラッシュが二体のオメガゼールに命中し、大爆発が起こり、出現した光の球体を、ドラグレッダーとダークウイングがそれぞれ吸収した。

それを見届けたドラゴンナイトは、ウイングナイトに声をかけた。

「ゼイビアックスの手下なのか？」

「そう思いたければ、そう思えばいい。」

それだけ言うと、ウイングナイトは、近くのガラス窓に消えていった。

OREジャーナルに戻った麻弥は、大久保に事の顛末を報告した。

報告を聞いた大久保は、渋い表情を浮かべながら言った。

「なるほどなあ〜。宇宙人によるアブダクションの末の意識消失か〜。日本でも以前から、その手の話しは幾つかあるが、いずれも確証の無い噂話の領域だ。しかし…」

「編集長。この話しは秘密にしましょう。少しでも外部に情報が漏れたら、森里君は、お父さんに面会出来なくなります。それに、仮面ライダーの事も。」

「ええ〜！せつかくの特ダネかも知れないのに！」

真二が不満の声を上げた。

「森里君が、お父さんに会えなくなったらどうするの!？」

麻弥が真二をどやした。

「そうよ。何でもかんでも情報を流せば良いってものじゃないのよ!」

奈々子も、麻弥の意見に賛同した。

「とにかく麻弥。行方不明者に関する取材は、引き続きやってくれ。後は俺が判断するわ。」

「わかりました。」

大久保の指示を受け、麻弥は、再びオフィスを後にした。

変身を解除し、外に出たレンを、螢一が追いかけた。

「桂馬さんがあんなったのもアンタの仕業か!？」

「何の話した? 失踪したんじゃないのか？」

訝しげな表情を浮かべながら、レンが言った。

「見つかったんですよ! 今猫実市立病院に入院してます。ライブエナジーを抜かれて意識が無いんですよ。」

「そうだったのか…。」

レンが、氣遣わしげに言った。

「ゼイビックスを倒せば、元に戻るって。」

北岡にゼイビックスとウイングナイトを倒せばと言われたにも関わらず、レンの名前を出さなかったのは、まだ螢一の中で、レンを敵と認めたくないという気持ちがあった。

するとレンが、意外な事を口にした。

「治療法は無い。今となつてはな。」

「何だつて？」

螢一が驚きの声を上げた。

「治せる人は居たが、その人は死んでしまった。残念だが…。」

レンの話しに、螢一が声を張り上げた。

「そんな事言つて、ゼイビアックスと戦わせないつもりか！その手には乗らないぞ！」

そう吐き捨てる、螢一は、その場を去った。

一人残されたレンは、憎々しげに呟いた。

「ゾルダの奴。」

猫実市内をバイクで走っていたレンは、携帯電話で話しをしている北岡を見つけると、バイクを降りた。北岡は、レンの姿を見ると、電話を切って逃げ出した。

レンは、ゆっくりと追い詰める様に、北岡の後を追った。

北岡は、近くのビルの窓ガラスに飛び込むと、レンを挑発しながら奥に消えた。

レンは、北岡が飛び込んだ窓ガラスの前に立つと、カードデッキをかざした。

「変身！」

掛け声と共にVバックルにカードデッキを装填し、ウイングナイトに変身すると、窓ガラスに飛び込んだ。

ライドシユーターを降りたウイングナイトは、辺りを見回していると、背後から、巨大な牛の頭部の様な胴体を持つモンスター『ネールオリオン』が、猛然と突進してきた。

ほとんど不意打ちに近い状態で攻撃を受けたウイングナイトは、後方のワゴン車に叩きつけられた。

ネールオリオンは、更にウイングナイトに向かって突進してくる。

再度突進を受けて吹っ飛ばされたウイングナイトは、受け身をとって立ち上がると、ダークバイザーにカードをベントインした。

『ソードベント』

ダークバイザーを腰に戻し、ウイングランサーを手にすると、三度突進してくるネールオリオンを迎え撃った。

突進してきたネールオリオンを寸前でかわし、ネールオリオンはそのまま近くの車に激突した。

その背後から、ウイングナイトは、ウイングランサーで数回切り付ける。

ネールオリオンは勢いよくウイングナイトの方を向くと、下腹部の牛の口の様な箇所から、光弾を放った。

咄嗟にウイングナイトは、ウイングランサーで光弾を受け止めたが、衝撃で吹っ飛ばされた。

ウイングナイトとネールオリオンの戦いを、物陰から見ていたゾルダは、マグナバイザーにカードをベントインした。

『シユートベント』

マグナバイザーを腰に戻し、ギガランチャーを手にしたゾルダは、ネールオリオンと交戦しているウイングナイトに向けて撃った。

ネールオリオンに気をとられていたウイングナイトは、ギガランチャーの弾丸をまともに喰らって吹っ飛ばされた。

「うおお〜！」

倒れ伏したウイングナイトに、ゾルダが言った。

「俺に用か？」

「くっ！」

ウイングナイトは立ち上がると、ダークバイザーにカードをベントインした。

『トリックベント』

シャドウイリユージョンを発動し、ウイングナイトは、ゾルダに突進して行った。

ゾルダは、ギガランチャーを投げ捨てると、マグナバイザーを取り出し、ウイングナイトに向けて撃った。

マグナバイザーによって分身体を消され、本体のウイングナイトも倒れ伏した。

ゾルダは、更にマグナバイザーを連射してくる。

ウイングナイトはゾルダの銃撃をかわすと、ダークバイザーに

カードをベントインした。

『ナスティベント』

飛来したダークウイングが、ゾルダにソニックブレイカーを放つ。

「ぐわあ〜〜！」

耳を塞ぎながら、ゾルダはうずくまった。

ソニックブレイカーのダメージから立ち直ったゾルダに、ウイングナイトが言った。

「螢一を騙したな！」

「あんなガキ騙すなんざチヨロいもんさ。」

「貴様〜！」

螢一を侮辱したようなゾルダの物言いに、激昂したウイングナイトが、ダークバイザーで切り掛かった。

ダークバイザーの斬撃をかしながら、ゾルダも反撃する。

一進一退の攻防を繰り返していた二人の仮面ライダーが、ダークバイザーの斬撃を左手で受け止めたゾルダに、ウイングナイトが言った。

「地球を売り渡して何を手に入れるつもりだ!？」

「ゼイビアクスが俺を地球の王様にしてくれるってさ。それに、地球最後の男になれば、可愛い娘ちゃんも選びたい放題ってわけ。」

不埒なゾルダの願望に、ウイングナイトがゾルダを罵った。

「廃墟の星でハーレムごっこだと?それがモテない男の夢って奴か!？」

言うと同時にウイングナイトは、ゾルダの下腹に蹴りを入れ、

その反動を利用して後方へジャンプし、空中で一回転して着地した。  
「逃がさねえよ！」

ゾルダは、マグナバイザーを取り出し、ウイングナイトに向けて連射した。

ウイングナイトは、走りながら、マグナバイザーの弾丸をかわす。

ゾルダは、マグナバイザーにカードをベントインした。

『シュートベント』

電子音の後、空中から巨大な二連装砲『ギガキャノン』が出現し、ゾルダの両肩に装着された。

それと同時に、ゾルダはウイングナイトにギガキャノンを撃つた。

「うおー！」

直撃は避けたものの、着弾の衝撃と爆風で、ウイングナイトは吹っ飛ばされた。

「これで終わりだ。」

ゾルダは更に、マグナバイザーにカードをベントインした。

『ファイナルベント』

ゾルダの前の地面から、マグナギガが現れると、ゾルダは、マグナギガの背中にある差し込み口にマグナバイザーをセットした。

「あばよ。ウイングナイト。」

そう言ってゾルダは、マグナバイザーのトリガーを引いた。

すると、マグナギガの全身から、大量のミサイルやレーザーが打ち出された。

ゾルダの必殺技『エンドオブワールド』である。

「うわぁ〜〜！」

かろうじてエンドオブワールドの直撃をかわしたウイングナイトだが、爆風で吹っ飛ばされ、上から落ちてきた大量の瓦礫の下敷きになった。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0982v/>

---

ああっ女神さま ドラゴンの騎士

2011年11月18日15時06分発行